

CA Business Service Insight

インストール ガイド

8.2.5



このドキュメント（組み込みヘルプシステムおよび電子的に配布される資料を含む、以下「本ドキュメント」）は、お客様への情報提供のみを目的としたもので、日本 CA 株式会社（以下「CA」）により随時、変更または撤回されることがあります。

CA の事前の書面による承諾を受けずに本ドキュメントの全部または一部を複写、譲渡、開示、変更、複本することはできません。本ドキュメントは、CA が知的財産権を有する機密情報です。ユーザは本ドキュメントを開示したり、
(i) 本ドキュメントが関係する CA ソフトウェアの使用について CA とユーザとの間で別途締結される契約または (ii) CA とユーザとの間で別途締結される機密保持契約により許可された目的以外に、本ドキュメントを使用することはできません。

上記にかかわらず、本ドキュメントで言及されている CA ソフトウェア製品のライセンスを受けたユーザは、社内でユーザおよび従業員が使用する場合に限り、当該ソフトウェアに関連する本ドキュメントのコピーを妥当な部数だけ作成できます。ただし CA のすべての著作権表示およびその説明を当該複製に添付することを条件とします。

本ドキュメントを印刷するまたはコピーを作成する上記の権利は、当該ソフトウェアのライセンスが完全に有効となっている期間内に限定されます。いかなる理由であれ、上記のライセンスが終了した場合には、お客様は本ドキュメントの全部または一部と、それらを複製したコピーのすべてを破棄したことを、CA に文書で証明する責任を負います。

準拠法により認められる限り、CA は本ドキュメントを現状有姿のまま提供し、商品性、特定の使用目的に対する適合性、他者の権利に対して侵害のないことについて、黙示の保証も含めいかなる保証もしません。また、本ドキュメントの使用に起因して、逸失利益、投資損失、業務の中断、営業権の喪失、情報の喪失等、いかなる損害（直接損害か間接損害かを問いません）が発生しても、CA はお客様または第三者に対し責任を負いません。CA がかかる損害の発生の可能性について事前に明示に通告されていた場合も同様とします。

本ドキュメントで参照されているすべてのソフトウェア製品の使用には、該当するライセンス契約が適用され、当該ライセンス契約はこの通知の条件によっていかなる変更も行われません。

本ドキュメントの制作者は CA です。

「制限された権利」のもとでの提供: アメリカ合衆国政府が使用、複製、開示する場合は、FAR Sections 12.212、52.227-14 及び 52.227-19(c)(1)及び(2)、ならびに DFARS Section 252.227-7014(b)(3) または、これらの後継の条項に規定される該当する制限に従うものとします。

Copyright © 2013 CA. All rights reserved. 本書に記載された全ての製品名、サービス名、商号およびロゴは各社のそれぞれの商標またはサービスマークです。

CA への連絡先

テクニカルサポートの詳細については、弊社テクニカルサポートの **Web** サイト (<http://www.ca.com/jp/support/>) をご覧ください。

目次

第 1 章: 概要	9
パッケージ コンテンツ	9
第 2 章: 前提条件	11
バックアップ	11
ハードウェア前提条件	12
サーバソフトウェアの前提条件	13
データベース サーバの前提条件	14
アプリケーション サーバの前提条件	16
Web サーバの前提条件	20
クライアントソフトウェアの前提条件	24
ポートおよびプロトコル	27
第 3 章: 標準インストールの実行	29
開始前の確認事項	30
新しいデータベースの手動作成	31
インストールおよび地域の設定	32
複数のサーバへのインストール	33
LISTENER.ORA ファイル	34
TSNAMES.ORA ファイル	34
インストール ダイアログ ボックス	34
標準インストール ウィンドウ	35
サーバインストール - 標準	37
サーバ数 (トポロジ)	37
CA Business Service Insight サーバのインストール	39
クライアントインストール - 標準	43
コンポーネント	44
CA Business Service Insight クライアントのインストール	44
インストール後の作業	45
第 4 章: CA Business Service Insight のアップグレード方法	51
前提条件の確認	53
ファイルとフォルダのバックアップ	53

アップグレードの準備	54
Web サイトの存在確認	55
CA Business Service Insight のアップグレード	55
アップグレード ダイアログ ボックス	56
アップグレードの完了	59
プロキシ文字列の更新	60
API の更新	61

第 5 章: カスタム インストールの実行 63

カスタム インストール ダイアログ ボックス	65
------------------------------	----

第 6 章: 高可用性 69

概要	69
データベース サーバ	70
アプリケーション サーバ	70
Web サーバ	71
新規インストール	71
前提条件	72
アプリケーション サーバのインストール。	72
Web サーバのインストール	72
アダプタ サーバのインストール	73
設定	73
旧バージョンからのアップグレード	78
アプリケーション サーバのアップグレード	79
Web サーバのアップグレード	80
アダプタ サーバのアップグレード	80
サーバの設定	81
追加情報	86
高可用性を構成する設定可能なパラメータ	86
既知の問題	87

第 7 章: サイレント インストール 89

サーバのサイレント インストール	90
サーバ応答ファイルの記録	91
会社名の変更	93
ディレクトリの変更	93
機能の変更	94
ユーザ名とパスワードの変更	94

データベース パラメータの変更	95
再起動オプションの変更	96
サイレント モードでのサーバのインストールの実行	96
インストール後の作業	97
アプリケーションサーバサイレント インストール (アップグレード)	98
サーバ応答ファイルの記録	98
マイグレーションの実行	100
サーバ名の変更	100
スキーマ ユーザ名の変更	100
スキーマ パスワードの変更	101
システム パスワードの変更	101
ユーザ名の変更	101
パスワードの変更	102
クライアントのサイレント インストール	102
クライアント応答ファイルの記録	102
デスティネーションパスの変更	103
サイレント モードでのクライアントのインストールの実行	104

第 8 章: Linux サーバへの CA Business Service Insight データベースのインストール 105

Linux インストール	105
DB サーバへのメディアのダウンロード	105
セットアップ	106
インストール サブスクリプトの修正	106
インストール	109

第 9 章: インストール後に必要な作業 111

1 層インストール	111
多層インストール	112
サーバにアプリケーション コンポーネントおよび Web コンポーネントの両方が含まれる	112
APP コンポーネントと WEB コンポーネントを異なるサーバにインストール	113
3 層インストール: 詳細設定	114
MSMQ 構成	114
ACE2 構成	115
ダッシュボード: アドレス	116
ダッシュボード: 現在のステータス	117
レジストリ キー	118
言語の選択	118

付録 A: MS Word アドオンのインストール	119
付録 B: CA Technologies のデータベース オブジェクト用の命名規則ポリシー	121

第 1 章：概要

このガイドでは、新規に、またはアップグレードとして CA Business Service Insight をインストールするための手順を説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[パッケージ コンテンツ](#) (P. 9)

パッケージ コンテンツ

CA Business Service Insight をインストールする前に、このテーブルに示される必要なすべてのフォルダがあることを確認します。

フォルダ名	説明
サーバ	サーバ インストール フォルダ。
クライアント	クライアント インストール フォルダ。
前提条件	インストールまたは CA Business Service Insight へのアップグレードの前に必要とされるファイルが含まれるフォルダ。
セットアップ データベース	CA Business Service Insight データベース インスタンスのインストールまたはアップグレードに使用されるファイル、およびその他のデータベース ツールが含まれるフォルダ。セットアップ フォルダを参照してください。
サイレント	サイレント インストール応答ファイルの例が含まれるフォルダ。

第 2 章：前提条件

このセクションでは、CA Business Service Insight サーバおよびクライアント コンピュータ用の前提条件のリストを示します。CA Business Service Insight をインストールする前に、すべての前提条件を満たしていることを確認します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[バックアップ](#) (P. 11)

[ハードウェア前提条件](#) (P. 12)

[サーバソフトウェアの前提条件](#) (P. 13)

[クライアントソフトウェアの前提条件](#) (P. 24)

[ポートおよびプロトコル](#) (P. 27)

バックアップ

システムを元の状態に戻すことができるように、データベース、アプリケーション、および Web サーバのバックアップを実行することを推奨します。

バックアップの目的は、インストール中に問題が発生した場合に、システムを迅速かつ安全に元の状態に戻すことができるようにすることです。

次の手順に従ってください：

1. CA Business Service Insight サーバ前提条件のインストールを開始する前に、お使いのサーバ（データベース、アプリケーション、または Web サーバ）をバックアップします。
2. CA Business Service Insight のデータベース、アプリケーション、または Web 機能のインストールを開始する前、および、前提条件のインストールが完了した後に、お使いのサーバ（データベース、アプリケーション、または Web）をバックアップします。

ハードウェア前提条件

このセクションでは、各タイプの **CA Business Service Insight** サーバについて最小および推奨ハードウェア要件を説明します。さらに、このセクションでは、必要なネットワーク接続性について説明します。

ここで提供されるデータは一般的なガイドラインです。これらのデータは、実行中のプロジェクト固有の評価値やサイジング情報を置き換えるものではありません。

データベース サーバのハードウェア要件

以下の表に、**CA Business Service Insight** データベース サーバをホストするための最小および推奨ハードウェア要件を示します。データベース キャパシティは、以下のようなさまざまなパラメータに依存します。

- メトリック数
- Raw データの量
- 履歴データが保持される期間

コンポーネント	最小値	推奨
プロセッサ	デュアル 2.4GHz インテル コア または同等のプロセッサ	クアッド 2.4GHz インテル コア または同等のプロセッサ
メモリ	4GB RAM	8GB RAM
ストレージ	40GB	120GB*
ネットワーク	100Mbps Fast Ethernet 接続	1Gbps Fast Ethernet

* RAID 5 コントローラ、または同等の高可用性/高スループット ディスク構成を強く推奨します。

Oracle をサポートするハードウェア プラットフォームの詳細については、以下を参照してください：<http://www.oracle.com/technology/documentation/index.html>

アプリケーション サーバのハードウェア要件

以下の表に、**CA Business Service Insight** アプリケーション サーバをホストするための最小および推奨ハードウェア要件を示します。

コンポーネント	最小値	推奨
プロセッサ	デュアル 2.4GHz インテル コア または同等のプロセッサ	クアッド 2.4GHz インテル コア または同等のプロセッサ
メモリ	4GB RAM	8GB RAM

ストレージ	18GB	40GB*
ネットワーク	100Mbps Fast Ethernet 接続	1Gbps Fast Ethernet

* RAID 5 コントローラ、または同等の高可用性/高スループット ディスク構成を強く推奨します。

Web サーバのハードウェア要件

以下の表に、CA Business Service Insight Web サーバをホストするための最小および推奨ハードウェア要件を示します。

注：CA Business Service Insight サーバの操作に必要なサーバ数、CPU およびメモリのリソースは、ユーザ数やユーザ タイプに応じて増加します。

コンポーネント	最小値	推奨
プロセッサ	デュアル 2.4GHz インテル コア または同等のプロセッサ	クアッド 2.4GHz インテル コア または同等のプロセッサ
メモリ	4GB RAM	8GB RAM
ストレージ	18GB	40GB*
ネットワーク	100Mbps Fast Ethernet 接続	1Gbps Fast Ethernet

* RAID 5 コントローラ、または同等の高可用性/高スループット ディスク構成を強く推奨します。

サーバソフトウェアの前提条件

以下のセクションでは、データベース、アプリケーション、Web サーバのソフトウェア前提条件について説明します。アプリケーション サーバと Web サーバには特定の Windows 役割が必要です。すべてのサーバがすべての前提条件に適合していることを確認します。

データベース サーバの前提条件

重要: CA Business Service Insight は統合データベースをサポートしません。統合データベースを使用すると、将来のアップグレードや一部の機能に支障をきたす可能性があります。

以下の表は、必要なデータベース、バージョン、文字セット、サーバ前提条件を一覧にしたものです。

RDBMS ベンダー/ データベース	データベース バージョン/ エディション	データベース ソフトウェア のバージョン	プラットフォーム	文字セット
Oracle	Oracle 10 Standard、 Enterprise	10.2.0.5	Oracle 認定のオペレーティング システム	AL32UTF8 WE8MSWIN1252
	Oracle 11 Standard、 Enterprise	11.1.0.7	Oracle 認定のオペレーティング システム	AL32UTF8 WE8MSWIN1252
	Oracle 11 Standard、 Enterprise	11.2.0.3	Oracle 認定のオペレーティング システム	AL32UTF8 WE8MSWIN1252

データベース インストール スクリプトは、以下のプラットフォームでテストされました。

- Microsoft Windows 2003 (32 ビットおよび 64 ビット)。
- Microsoft Windows 2008 (32 ビットおよび 64 ビット)。
- Microsoft Windows 2008 R2 Enterprise エディション SP1 (64 ビット)。
- Unix-Sun Solaris 10.5。
- Linux

重要: 1 層インストールでは、Oracle Server は 32 ビットにする必要があります。Oracle データベースの 64 ビットのバージョンは使用しないでください。

- CA Business Service Insight をインストールする前に、Oracle サーバ、Oracle クライアント、およびデータベース接続設定コンポーネント（TNSnames.ora、listener.ora など）が正しくインストールおよび設定されていることを確認します。次に、OLEDB を使用してデータベースへの接続を確立し、作成するインスタンスを認識するようにリスナが設定されていることを確認します。
- TNSnames.ora はすべての CA Business Service Insight サーバに存在する必要があります。
- Listener.ora は CA Business Service Insight DB サーバに存在する必要があります。

- 新しいデータベースについては、AL32UTF8 または WE8MSWIN1252 を選択できます。

注: AL32UTF8 文字セットを選択すると、西欧以外の文字を格納できるようになりますが、より多くのスペースが必要になります。

- Oracle のバージョン 11 については、_optimizer_group_by_placement パラメータが FALSE であることを確認します。

注: SYS ユーザ権限で以下のコマンドを実行します。

- 現在の値を取得するには、以下のクエリを実行します。

```
SELECT a.ksppinm Param , c.ksppstvl InstanceVal
FROM x$ksppi a , x$ksppsv c
WHERE a.ksppinm = '_optimizer_group_by_placement'
AND a.indx = c.indx
```

- パラメータを false に設定するには、以下のコマンドを実行します。

```
alter system set "_optimizer_group_by_placement" = FALSE
```

注: 他のプラットフォームにデータベースをインストールすると、スクリプトの調整が必要な場合があります。

- インストール処理を開始する前に、データベース サーバに少なくとも 10GB の空き容量を確保する必要があります。

重要: インストールを完了してデータベースを完全にインストールするには、データベース サーバに十分な空き容量を確保する必要があります。

RAC データベースへのインストール

CA Business Service Insight と RAC の間には互換性があります。ただし、インストールの一部として RAC は作成されません。RAC を使用するには、以下のいずれかのオプションを選択します。

- CA の InstallDB スクリプトを使用して、製品をインストールします。RAC をサポートするようにインスタンスを再設定し、別のインスタンスを追加して RAC データベースを作成します。
- 自分の RAC を作成します。インスタンスを作成せずに CA のスクリプトを実行します。CA のスクリプトは CA Business Service Insight 関連のアクションのみを実行します。

Oracle がサポートされるプラットフォームの詳細については、
<http://www.oracle.com/technology/documentation/index.html> で Oracle のオンラインドキュメントを参照してください。

アプリケーション サーバの前提条件

CA Business Service Insight 8.2.5 をインストールする前に、アプリケーション サーバが以下の前提条件を満たす必要があります。

オペレーティング システム

このページの表に、アプリケーション サーバをホストするためにサポートされているオペレーティング システム プラットフォームの一覧を示します。

OS プラットフォーム	OS バージョン	パッチレベル	ビット数	OS 言語パック
Microsoft	Windows 2003 Standard または Enterprise エディション	SP2	32 ビット	要求される地域の設定による
	Windows 2008 Standard または Enterprise エディション	SP2	32 ビット または 64 ビット	要求される地域の設定による
	Windows 2008 R2 Enterprise エディション	SP1	64 ビット	要求される地域の設定による

重要: Windows 2008 システムについては、アプリケーションサーバの「[必要な Windows の役割と機能 \(P. 19\)](#)」で詳細を参照してください。

- この製品は IP バージョン 6.0 トレラントです。
- 3 台以上のサーバにインストールする場合、アプリケーションおよび Web サーバの時刻を同期してください。
- Microsoft.NET Framework 3.5 SP1 または 4.0 をインストールする必要があります。4.0 は Microsoft Word ブックレット プラグインに必要です。
- ASP.NET をインストールする必要があります。
- この製品は、サービスとエンティティ専用アカウントが必要です。
 - CA Technologies では、インストール時にローカル アカウントの代わりに CA Business Service Insight エンティティ用のドメイン アカウントを使用することを推奨します。同じアカウントがすべての CA Business Service Insight サーバに使用される必要があります。
 - 使用されているいずれのアカウントも、ローカル管理者グループのメンバーである必要があります。メンバーのユーザ名とパスワードを記録しておいてください。
- CA Business Service Insight をインストールする前に、「インストールおよび地域の設定」を参照してください。
- CA Business Service Insight をインストールする前に、Microsoft Message Queuing (MSMQ) をインストールし、設定します。

注: MSMQ は以下のポートを使用します。

- TCP : 1801
- RPC : 135、2101/2112、2103/2114、2105/2116
- UDP : 3527、1801
- JDK 1.6.16 環境 (32 ビット)

注: ACE2 では、アプリケーションサーバとして JBoss が使用されます。JBoss が実行されるサーバに次の ACE2 ポートが対応できることを確認します: 4073、1298、1299、8283、4744、4645、3728、19201、1361、1363、8293、8280、1300、5546、4657。

注: RawDataTools は Microsoft Visual C++ 2010 ランタイム ライブラリ (x86) を必要とします。このコンポーネントは Microsoft からダウンロードします。

マルチ層インストールの場合

- アプリケーションと Web サーバが別のマシンである場合、または複数のアプリケーション サーバがある場合、各サーバが同じ Windows ドメインに存在する必要があります。
- MSMQ を Active Directory Integration モード（ドメイン モードとも呼ばれる）でインストールします。
- アプリケーションと Web サーバを時間同期します。

Oracle 設定

1 層インストールの場合

- Oracle サーバは 32 ビットにする必要があります。Oracle データベースの 64 ビットのバージョンは使用しないでください。
- CA Business Service Insight をインストールする前に、Oracle サーバとデータベース接続設定コンポーネント（TNSnames.ora や listener.ora など）をインストールし、設定します。次に、OLEDB を使用してデータベースへの接続を確立し、作成するインスタンスを認識するようにリスナが設定されていることを確認します。
 - TNSnames.ora と Listener.ora がデータベース サーバに存在する必要があります。
 - Windows 32 ビット システムの場合、TNS_ADMIN キーがレジストリ パス HKLM¥SOFTWARE¥にある必要があります。Windows 64 ビット システムの場合、このパスは HKLM¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥です。

専用データベース サーバのある環境の場合

- CA Business Service Insight をインストールする前に、Oracle Client と Oracle OLEDB ドライバをインストールします。
- Oracle クライアントは 32 ビットにする必要があります。64 ビットのバージョンは使用しないでください。
- Oracle クライアントとデータベース接続設定コンポーネントを設定し、OLEDB を使用してデータベースへの接続を確立します。
 - TNSnames.ora がすべてのサーバに存在する必要があります。また、BSI データベースの TNSname をそこに定義する必要があります。
 - Listener.ora がデータベース サーバに存在する必要があります。
 - Windows 32 ビット システムの場合、TNS_ADMIN キーがレジストリ パス HKLM¥SOFTWARE¥にある必要があります。Windows 64 ビット システムの場合、このパスは HKLM¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥です。

- Oracle OLEDB Provider をアプリケーション サーバにインストールする必要があります。また、バージョンは Oracle データベース ソフトウェアと同じか、それ以降のバージョンにする必要があります。
- 既存の Oracle クライアントに Oracle OLEDB Provider を追加する場合、既存の Oracle ホームにインストールします。Oracle OLEDB Provider へのインストールに関するサポートについては、CA Technologies サポート チームにお問い合わせください。
- CA Business Service Insight アプリケーション サーバ NLS_LANG 設定はデータベース NLS_LANG 設定と同一である必要があります。
- CA Business Service Insight は以下のクライアントをサポートします。

RDBMS ベンダー/ データベース	データベース バージョン/ エディション	データベース ソフトウェアの バージョン	プラットフォーム	文字セット*
Oracle	Oracle 11 Standard、 Enterprise	11.2.0.3	Oracle 認定のオペレーティング システム	AL32UTF8 WE8MSWIN1252

必要な Windows の役割と機能

Application Server Windows 役割がアプリケーション サーバで必要です。

以下の Windows 機能がアプリケーション サーバの役割 Application Server で必要です。

- Application Server Foundation (Windows 2008 SP2 でのみ)
- .NET Framework 3.5.1 (Windows 2008 R2 でのみ)
- Windows プロセス有効化サービス サポート
 - Message Queuing 有効化
 - HTTP 有効化

- 分散トランザクション
 - WS-Atomic トランザクション

重要: Web サーバ (IIS) サポート機能を選択しない場合、警告画面がインストール中に表示されます。警告を無視し、インストールを続行します。

注: マルチ層インストールの場合、アプリケーションと Web サーバが別の場合、または複数のアプリケーションサーバが存在する場合、プライマリ アプリケーションサーバに MSMQ 機能をインストールする必要があります。さらに、MSMQ 下にあるすべてのサブコンポーネントをインストールする必要があります。これは MSMQ を AD (ドメインモード) でインストールします。このプロセスはドメイン権限を必要とする場合があります。

Web サーバの前提条件

CA Business Service Insight 8.3 をインストールする前に、Web サーバが以下の前提条件を満たす必要があります。

重要: 1 層インストールでは、Oracle Server は 32 ビットにする必要があります。Oracle データベースの 64 ビットのバージョンは使用しないでください。

オペレーティング システム

この表に、Web サーバをホストできるオペレーティング システム プラットフォームの一覧を示します。

OS プラットフォーム	OS バージョン	パッチレベル	Bitness	Web サーバ	OS 言語パック	追加設定
Microsoft	Windows 2003 Standard または Enterprise エディション	SP2	32 ビット	IIS 6.0	要求される地域の設定による	IIS (Web サーバ)
	Windows 2008 Standard または Enterprise エディション	SP2	32 ビット または 64 ビット	IIS 7.0	要求される地域の設定による	IIS 6 互換モードを備えた IIS (Web サーバ)
	Windows 2008 Server R2 Enterprise エディション	SP2	64 ビット	IIS 7.0	要求される地域の設定による	IIS 6 互換モードを備えた IIS (Web サーバ)

重要: Windows 2008 システムについては、Web サーバの「[必要な Windows の役割と機能 \(P. 23\)](#)」で詳細を参照してください。

- Microsoft Windows 2008 Server R2 では、Active Server Pages 拡張を Web サーバ上で「許可する」に設定する必要があります。
- この製品は IP バージョン 6.0 トレラントです。
- Microsoft .NET Framework 3.5 SP1 または 4.0 をインストールする必要があります。4.0 は Microsoft Word ブックレット プラグインに必要です。
- ASP.Net をインストールする必要があります。
- この製品は、サービスとエンティティ専用アカウントが必要です。
 - CA Technologies では、インストール時にローカル アカウントの代わりに CA Business Service Insight エンティティ用のドメイン アカウントを使用することを推奨します。同じアカウントがすべての CA Business Service Insight サーバに使用される必要があります。
 - 使用されているいずれのアカウントも、ローカル管理者グループのメンバーである必要があります。メンバーのユーザ名とパスワードを記録しておいてください。
- CA Business Service Insight をインストールする前に、「インストールおよび地域の設定」セクションを参照してください。
- CA Business Service Insight をインストールする前に、Microsoft Message Queuing (MSMQ) をインストールし、設定します。セットアップがマルチ層環境の場合

注: MSMQ は以下のポートを使用します。

- TCP : 1801
- RPC : 135、2101/2112、2103/2114、2105/2116
- UDP : 3527、1801
- JDK は、現在のリリースの一部として自動的にインストールされます。
- JBoss 7 は、現在のリリースの一部として自動的にインストールされます。これには以下が含まれます。
 - JBoss Messaging 1.4.5
 - JBoss Remoting 2.2.3 SP1

注: コンテンツ転送では JBoss アプリケーション サーバ上の以下のポートが使用されます: 1198、1199、1200、1201、1261、1262、3628、3973、4544、4545、4548、5546、4557、8180、8183、8193、19101。

マルチ層インストールの場合

- アプリケーションと Web サーバが別のマシンである場合、または複数のアプリケーション サーバがある場合、各サーバが同じ Windows ドメインに存在する必要があります。
- MSMQ を Active Directory Integration モード（ドメイン モードとも呼ばれる）でインストールします。
- アプリケーションと Web サーバを時間同期します。

Oracle 設定

1 層インストールの場合

- Oracle サーバは 32 ビットにする必要があります。Oracle データベースの 64 ビットのバージョンは使用しないでください。
- CA Business Service Insight をインストールする前に、Oracle サーバとデータベース接続設定コンポーネント（TNSnames.ora や listener.ora など）をインストールし、設定します。次に、OLEDB を使用してデータベースへの接続を確立し、作成するインスタンスを認識するようにリスナが設定されていることを確認します。
 - TNSnames.ora と Listener.ora がデータベース サーバに存在する必要があります。
 - Windows 32 ビット システムの場合、TNS_ADMIN キーがレジストリ パス HKLM¥SOFTWARE¥にある必要があります。Windows 64 ビット システムの場合、このパスは HKLM¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥です。

専用データベース サーバのある環境の場合

- CA Business Service Insight をインストールする前に、Oracle Client と Oracle OLEDB ドライバをインストールします。
- Oracle クライアントは 32 ビットにする必要があります。64 ビットのバージョンは使用しないでください。
- Oracle クライアントとデータベース接続設定コンポーネントを設定し、OLEDB を使用してデータベースへの接続を確立します。
 - TNSnames.ora がすべてのサーバに存在する必要があります。また、BSI データベースの TNSname をそこに定義する必要があります。
 - Listener.ora がデータベース サーバに存在する必要があります。
 - Windows 32 ビット システムの場合、TNS_ADMIN キーがレジストリ パス HKLM¥SOFTWARE¥にある必要があります。Windows 64 ビット システムの場合、このパスは HKLM¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥です。

- Oracle OLEDB Provider をアプリケーション サーバにインストールする必要があります。また、バージョンは Oracle データベース ソフトウェアと同じか、それ以降のバージョンにする必要があります。
- 既存の Oracle クライアントに Oracle OLEDB Provider を追加する場合、既存の Oracle ホームにインストールします。Oracle OLEDB Provider へのインストールに関するサポートについては、CA Technologies サポート チームにお問い合わせください。
- CA Business Service Insight アプリケーション サーバ NLS_LANG 設定はデータベース NLS_LANG 設定と同一である必要があります。
- CA Business Service Insight は以下のクライアントをサポートします。

RDBMS ベンダー/ データベース	データベース パー ジョン/ エディション	データベース ソ フトウェアの バージョン	プラットフォーム	文字セット*
Oracle	Oracle 11 Standard、 Enterprise	11.2.0.3	Oracle 認定のオ ペレーティング システム	AL32UTF8 WE8MSWIN1252

必要な Windows の役割と機能

以下の Windows 役割が Web サーバで必要です。

- アプリケーション サーバ
- Web サーバ (IIS)

以下の Windows 機能が Web サーバの役割 Application Server で必要です。

- Web サーバ (IIS) サポート
- COM+ ネットワーク アクセス
- Windows プロセス有効化サービス サポート
 - Message Queuing 有効化
 - HTTP 有効化
- 分散トランザクション
 - WS-Atomic トランザクション

注: マルチ層インストールの場合、アプリケーションと Web サーバが別の場合、または複数のアプリケーション サーバが存在する場合、Web サーバに MSMQ 機能をインストールする必要があります。さらに、MSMQ 下にあるすべてのサブコンポーネントをインストールする必要があります。これは MSMQ を AD (ドメインモード) でインストールします。これはドメイン権限を必要とする場合があります。

以下の Windows 機能が Web サーバの Web サーバ (IIS) 役割で必要です。

- 「HTTP 共通機能」グループのすべてのサービス
- 「アプリケーション開発」グループのすべてのサービス
- 健全性と診断
 - HTTP ログ機能
 - ログ ツール
 - 要求監視
 - トレース
- セキュリティ
 - ダイジェスト認証
 - クライアント証明書マッピング認証
 - IIS クライアント証明書マッピング認証
 - URL 認可
 - 要求のフィルタリング
 - IP およびドメインの制限
- Performance グループのすべてのサービス
- Management Tools グループのすべてのサービス

クライアントソフトウェアの前提条件

この表に、クライアントの前提条件を示します。

OS プラットフォーム	OS バージョン	パッチ レベル/バージョン
Microsoft	Microsoft Windows XP SP3 (32 ビット バージョンのみ)	SP3
	Microsoft Windows Vista (32 ビット バージョンおよび 64 ビット バージョン)	
	Microsoft Windows 7 (32 ビット バージョンおよび 64 ビット バージョン)	

Microsoft .NET Framework 4 ランタイム。

この .NET Framework は、Microsoft Word 2010 アドインを使用してブックレットを作成するのに必要です。アドインはリボン内のタブとして表示され、.docx 形式のテンプレートを作成し、事前定義済みタグを使用してテンプレートを設計できます。

さらに、CA Business Service Insight Web システムのメトリックメモの拡張機能があります。メトリックメモを MS Word で編集し、文書として保存できます。その文書をメトリックメモとしてシステムにアップロードできます。このオプションは管理者によって設定できます。

.Net 4 の詳細については、Microsoft の Web サイトを参照してください。

Microsoft Office Web コンポーネント 2003	バージョン 10 また
Microsoft Office Web コンポーネントの詳細については、	はそれ以降。
Microsoft の Web サイトを参照してください。	

Microsoft Silverlight

Microsoft Silverlight は、インタラクティブなユーザ体験を作成するための無償の .NET Framework プラグインです。

注: .NET 4.0 は Microsoft Word ブックレットプラグインに必要です。

Silverlight とそのインストールの詳細については、Microsoft の Web サイトを参照してください。

Adobe	Adobe Flash Player。詳細については、Adobe の Web サイトを参照してください。	バージョン 8 またはそれ以降。
Java	JRE (Java Runtime Environment) 1.4.2.3 Java Runtime Environment の詳細については、 http://java.com/en/download/help/sysreq.xml http://java.com/en/download/help/sysreq.xml を参照してください。	バージョン 1.4.2.3 またはそれ以降

- クライアントは、Internet Explorer Web ブラウザの以下のバージョンをサポートします。
 - 7.0
 - 8.0
 - 9.0
- クライアントには以下のセキュリティ設定が必要です。
 - クライアント スクリプト実行 (許可済み)
 - IIS セッション状態可用性 (有効)
 - セッション Cookie (有効)
 - 永続ブラウザ Cookie (有効)
 - ポップアップ ブロック (無効) CA Business Service Insight が信頼済みサイトとして定義されている、またはポップアップ ブロックがインストールまたは有効化されている。
 - ActiveX の実行 (許可済み)。会社の方針によりこの項目の設定が許可されていない場合は、クライアントを実行します。
 - Java アプレットの有効化 (有効)

ポートおよびプロトコル

CA Business Service Insight は任意の数のサーバに展開できる多層アプリケーションです。サーバの数は、1 つ（スタンドアロン展開）から多数（3 層、または高可用性の展開や複数のアプリケーション サーバ インスタンスの場合はそれ以上）まで自由に構成できます。

プロセス間通信は単一のサーバ展開では必ずしも重要ではありませんが、サーバ数が増加するにつれて、プロセス間通信の発生を制御して安定したアプリケーション パフォーマンスを保証するために、プロセス間通信を理解することが重要になります。

企業環境における展開では、ほとんどの場合で標準の 3 層モデルが使用され、さまざまな理由により物理サーバ間にファイアウォールが設置されているケースが多く見られます。このセクションでは、CA Business Service Insight で使用される通信の概要を説明します。さまざまな通信のプロトコルとポートについての詳細情報が示されており、ファイアウォールの設定に役立ちます。

第 3 章：標準インストールの実行

このセクションでは、CA Business Service Insight サーバのインストールに必要な前提条件と手順について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[開始前の確認事項](#) (P. 30)

[新しいデータベースの手動作成](#) (P. 31)

[インストールおよび地域の設定](#) (P. 32)

[複数のサーバへのインストール](#) (P. 33)

[インストール ダイアログ ボックス](#) (P. 34)

[サーバインストール - 標準](#) (P. 37)

[クライアントインストール - 標準](#) (P. 43)

[インストール後の作業](#) (P. 45)

開始前の確認事項

- データベースを手動で作成する場合、インストールを開始する前に「新しいデータベースの手動作成」セクションをお読みください。そのトピックの `OBLICORE_ROOT` パラメータの説明を参照します。

重要: Windows システムにデータベースがインストールされていない場合は、データベースを手動で作成します。

- マルチ層システムの場合、インストール順序に従ってインストールを実行します。詳細については、「[サーバの数 \(トポロジ\)](#) (P. 37)」を参照してください。
- CA のデフォルト設定を使用しない場合は、[CA Technologies のデータベースオブジェクト用の命名規則ポリシー](#) (P. 121) を印刷します。ユーザのデータベース命名規則が CA Technologies のポリシーと異なる場合、インストールの前にフォームに記入して CA サポートにお問い合わせください。
- インストールに関連する章を印刷します ([クライアントインストール - 標準](#) (P. 43)、旧バージョンからのアップグレード、カスタムインストール、[高可用性](#) (P. 69)、[サイレントインストール](#) (P. 89))。
- 設定プログラムを実行する前に Windows プログラムをすべて終了します。
- インストールディレクトリ名に「&」および「.」（ドット）が含まれないことを確認します。

Note: 注: デフォルトインストールフォルダの場所は `C:\Program Files\CA\Cloud Insight\Setup` (または、`%ProgramFiles%\CA\Cloud Insight\Setup`) です。インストール CD からインストールフォルダにインストールフォルダ (すべてのサブフォルダを含む) のコンテンツをすべてコピーします。CD から実行すると、インストールスクリプトが必要な動的なスクリプトやログファイルを作成できません。

重要: 1 層インストールでは、Windows、Oracle Server、Oracle クライアントは 32 ビットにする必要があります。64 ビットバージョンのアプリケーションは使用しないでください。Oracle Server はバージョン 11.2.0.3 にする必要があります。

新しいデータベースの手動作成

この手順は任意であり、（手動で作成したデータベースを使用する場合は）CA Business Service Insight の他の要素（サーバまたはクライアント）をインストールする前に実行される必要があります。

注：この手順（データベースの手動作成）では Cloud_Insight_Server_8.2.exe を使用しません。代わりに Main.bat ファイル（Windows）または Main.sh ファイル（UNIX）を使用します。

注：bat および sh ファイルは、Server¥program files¥CA¥Cloud Insight¥Setup¥InstallDB の下にある CA Business Service Insight メイン インストール CD にあります。

注：この手順では、アプリケーション サーバおよび Web サーバはインストールされません。

以下の手順に従います。

1. 入力するパラメータ値が「パラメータの説明」に一致するように、start_parameter.ini ファイルのパラメータを編集します。

注：start_parameter.ini ファイルには、この表に一覧表示されたパラメータのみが存在する必要があります。その他のパラメータは削除します。

パラメータ	パラメータの説明
OBLICORE_ROOT	目的のデータベース配置場所。設定では、このフォルダの下にフォルダがデータベース名で作成されます（例：c:¥Oblicore）。 注：インストールを開始する前にこのフォルダを作成します。インストールセットアップでは、このフォルダは作成されません。
DB_NAME	データベース名。名前の長さは 8 文字以下にする必要があります。
ORACLE_HOME	これは「Oracle Home」のフォルダです（Windows の場合：レジストリに基づく）。 「Oracle Home」には BSI インスタンスの作成と実行に使用される Oracle Server ソフトウェアが置かれます。インスタンスへの接続に使用される Oracle Client ソフトウェアは置かれません。
SYS_PASS	SYS ユーザのパスワード。
OBLICORE_USER	CA Business Service Insight データベース オブジェクトを配置するユーザスキーマの名前。

OBLICORE_PASS	スキーマ パスワード。
OBLIDBADMIN_PASS	管理データベース ユーザのパスワード。
DB_CHARSET	UTF-8 または MSWIN (1252) を選択します。UTF-8 を推奨します。
DB_SYNONYM	Public または Private シノニムを選択します。

- オペレーティング システムに適切な Main ファイルを実行します。
 - Windows ベースのシステム : Main.bat ファイル (場所 : Setup¥InstallDB フォルダ)。
 - UNIX ベースのシステム : Main.sh ファイル (場所 : Setup¥InstallDB フォルダ)。

注: Setup¥InstallDB フォルダの内部からファイルを実行します。

- コマンドライン ウィンドウに表示されたパラメータを確認します。
- 「Y」と入力して、データベース作成処理を開始します。
- プロンプトで任意のキーをクリックし、プロセスを完了します。
- ログ ファイルでエラーを確認します。

ファイルの場所はポップアップ画面に表示されます。

インストールおよび地域の設定

地域言語設定が英語以外のときは、一時的に設定を「英語 (米国)」に変更し、以下のインストール手順に従ってください。

次の手順に従ってください:

- CA Business Service Insight をインストールする前に、地域の設定を「英語 (米国)」に変更します。
- このガイドに記載されている手順に従ってインストールします。
- 再起動します。
- 地域の設定を元に戻します。
- 再起動します。
- CA Business Service Insight を使用します。

複数のサーバへのインストール

次の手順に従ってください:

1. Web サーバに移動して、分散トランザクション コーディネータ サービスを [開始] に設定します。
2. World Wide Web Publishing サービスを [開始] に設定します。
3. Oracle クライアントとデータベース接続設定コンポーネントを正しくインストールして設定し、OLEDB からデータベースへの接続を確立します。
 - a. TNSnames.ora をすべてのサーバにインストールおよび設定します
 - b. Listener.ora をデータベース サーバにインストールおよび設定します

アプリケーションおよび Web サーバ

1. ローカル ネーミング構成ファイル (\$ORACLE_HOME¥network¥admin¥TNSNAMES.ORA) に、サービス エイリアス、および正しいホスト名とポート (デフォルトは 1521) が含まれていることを確認します。

DB Server

次の手順に従ってください:

1. リスナ構成ファイル (\$ORACLE_HOME¥network¥admin¥LISTENER.ORA) が正しく設定されており、作成されるインスタンスを認識することを確認します (以下の LISTENER.ORA ファイルの例を参照)。
2. コマンドプロンプト ウィンドウを開き、以下のコマンドを入力します。

```
lsnrctl status
```

 - サービス サマリのリストが表示されます。
3. メッセージが表示されない場合は、以下のコマンドを実行します。

```
lsnrctl start
```

コマンドが正常に完了したことを通知するメッセージが表示されます
4. ファイル (\$ORACLE_HOME¥network¥admin¥SQLNET.ORA) に以下の行が含まれていることを確認します。

```
SQLNET.AUTHENTICATION_SERVICES = (NTS)
```
5. Oracle クライアントとリスナ間の通信をテストします。
 - a. コマンドラインから以下のコマンドを実行します。

```
Tnsping <tns_entry_name>
```

システムは "OK" を返し、応答時間が表示されます。

LISTENER.ORA ファイル

```
SID_LIST_LISTENER =
  (SID_LIST =
    (SID_DESC =
      (GLOBAL_DBNAME = OBLICORE)
      (ORACLE_HOME = C:\app\Administrator\product\11.2.0\dbhome_1)
      (SID_NAME = oblicore)
    )
  )

LISTENER =
  (DESCRIPTION_LIST =
    (DESCRIPTION =
      (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP)(HOST = server12.ca.com)(PORT = 1521))
      (ADDRESS = (PROTOCOL = IPC)(KEY = EXTPROC1521))
    )
  )
```

TSNAMES.ORA ファイル

```
OBLICORE =
  (DESCRIPTION =
    (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP)(HOST = server12.ca.com)(PORT = 1521))
    (CONNECT_DATA =
      (SERVER = DEDICATED)
      (SERVICE_NAME = oblicore)
    )
  )
```

インストール ダイアログ ボックス

このセクションでは、標準およびカスタム インストールのダイアログ ボックスとその使用方法について説明します。

標準インストール ウィンドウ

以下の表に、標準インストールのダイアログ ボックスおよび関連情報（パラメータと値）のリストを示します。

注: ダブル ダガー (‡) が付いているエントリはダブル バイト文字を使用することはできません。

注: Oracle の命名規則では、特定の文字の使用がサポートされていません。Oracle の特定の要件（例: ASCII）および制限（特殊文字、ダブルバイト文字など）については、Oracle の資料を参照してください。

注: 組織名にはダブル バイト文字を含めることができません。

名前	パラメータ	指定可能な値	特記事項
データベース作成 ‡ 次のインストール時に開きます: データベース	Oracle バージョン データベース ファイルの場所 データベース サーバ名 文字セット シノニム	デフォルト値: サーバのデフォルト値 データベース ファイルの配置場所 ‡ データベース サーバの名前 ‡ UTF8 または MSWIN Public または Private	[ユーザの選択] ウィンドウの使用中に、Microsoft 標準の [ネットワーク パスワードの入力] ウィンドウが何度か表示されます。 ドメインにログオンしていない場合に、このウィンドウが表示されます。必要に応じて、有効なドメインユーザおよびパスワードを入力してドメインにアクセスします。
データベース接続 ‡ 次のインストール時に開きます: データベース アプリケーション Web サイト	Oracle バージョン CA Business Service Insight データベース インスタンス TNS 名 ‡		CA Business Service Insight の TNS 名を TNSNAMES.ORA ファイルに入力します。 ‡

名前	パラメータ	指定可能な値	特記事項
ログオン情報 ‡ 次のインストール 時に開きます： アプリケーション Web サイト	ユーザ名 パスワード [新規ユーザの情 報] ボタン	インストールを実行した ユーザの名前 ‡ ユーザ パスワード ‡ [新規ユーザの情報] の行 を参照	デフォルトで割り当てら れるユーザ名は、インス トールを実行したユーザ アカウントです。 ユーザ名とパスワードを ドメイン アカウントに変 更することを推奨しま す。
ユーザの選択 次のインストール 時に開きます： アプリケーション Web サイト	オブジェクト タイ プ 場所	[ユーザの選択] ボタンを 選択した後のログオン情 報画面内。	管理者ローカル グループ に属しているユーザを選 択する必要があります。
新規ユーザの情報 次のインストール 時に開きます： アプリケーション Web サイト	ドメインまたはサー バ グループ ユーザ名 パスワード パスワードの確認		このダイアログ ボックス で、新しい CA Business Service Insight ユーザ名を 作成できます。 注: このダイアログ ボッ クスには [ログオン] ダ イアログ ボックスからの みアクセスできます。
ログ サーバ環境 設定 次のインストール 時に開きます： Web サイト	ログ サーバ ネット ワーク アドレス ログ サーバ ネット ワーク ポート	デフォルトは、 Web サーバ を含む単一層および任意 の層で有効な localhost で す。 デフォルト値は 4040 で す。	ログ サーバがローカル ホスト上にない場合は、 アドレスを適切なサーバ に変更します。 注: アドレスはログ サー バのインストール先のア ドレスである必要があり ます。
ネットワーク パ スワードの入力	ユーザ名 パスワード		この画面は、ドメインに ログインしていない場合 にのみ表示されます。こ の画面は何度も表示され ることがあります。

サーバインストール - 標準

このセクションでは、CA Business Service Insight サーバを新規にインストールするのに必要な手順について説明します。

注: サーバおよびクライアントはサイレント モードでインストールできます。

サーバ数(トポロジ)

CA Business Service Insight 8.2.5 は、トポロジテーブルに記載されているとおり、1、2、3、および 4 サーバ以上のトポロジにインストールできます。

注:

- アップグレード時にトポロジタイプ（サーバ数）を変更する場合は、アップグレードを実行する前に CA サポートまでお問い合わせください。
- 最初から複数のサーバにインストールする場合、以下の順序でインストールする必要があります。
 - データベース（開始前の確認事項を参照）
 - アプリケーション
 - Web

インストール前に、この表で、使用するサーバ数（トポロジ）でのインストール順序を確認します。

トポロジタイプ (サーバ数)	説明	インストール 順序(各サーバ)
1 台のサーバ	データベース、アプリケーション、および Web コンポーネントは同じサーバにインストールされます。	このサーバ上で Cloud_Insight_Server_8.2.5.exe を実行。
2 台のサーバ	2 台のサーバに分散 ■ 1 台目のサーバ: データベース コンポーネント ■ 2 台目のサーバ: アプリケーションと Web コンポーネント	新規インストール ■ データベース サーバ上のデータベースの作成。 ■ アプリケーションと Web サーバのインストール。

トポロジ タイプ (サーバ数)	説明	インストール 順序(各サーバ)
3 台のサーバ	3 台のサーバに分散 ■ 1 台目のサーバ：データ ベース コンポーネント ■ 2 台目のサーバ：アプリ ケーション コンポーネント ■ 3 台目のサーバ：Web コン ポーネント	新規インストール ■ データベース サーバ上のデータベース の作成。 ■ アプリケーション サーバのインストー ル。 ■ Web サーバのインストール。
4 台以上のサーバ	4 台以上のサーバに分散 ■ 1 台目のサーバ：データ ベース コンポーネント ■ 2 台目のサーバ：アプリ ケーション コンポーネント ■ 3 台目のサーバ：Web コン ポーネント ■ 4 台以上のサーバ：追加の アプリケーション コンポー ネント	新規インストール ■ データベース サーバ上のデータベース の作成。 ■ アプリケーション サーバのインストー ル。 ■ Web サーバのインストール。 ■ 追加のアプリケーション コンポーネン トのインストール。

CA Business Service Insight サーバのインストール

このセクションでは、CA Business Service Insight サーバの新規インストールを完了するための手順について説明します。

- データベースを自動的に作成しない場合は、「[データベースの手動作成](#) (P. 31)」（オプション）を参照してください。
- 標準インストール手順を使用するのは、4 台以上のサーバにシステムを分散させる必要がない場合、または CA サポートがこのオプションを推奨している場合です。

次の手順に従ってください:

1. Server ディレクトリ内の Cloud_Insight_Server_8.2.5.exe をダブルクリックします。
[言語の選択] ダイアログ ボックスが表示されます。
2. インストール言語を選択して、[OK] をクリックします。
インストールの続行にアプリケーションが必要な場合は、それらがダイアログ ボックスにリスト表示されます。
3. [インストール] ボタンをクリックして、必要なプログラムを自動的にインストールします。
インストール ウィザードが表示されます。
4. [次へ] をクリックして続行します。
[エンド ユーザ使用許諾契約] ウィンドウが表示されます。
5. [次へ] をクリックします。
[エンド ユーザ使用許諾契約] ウィンドウが表示されます。
6. 使用許諾契約に同意し、[次へ] をクリックします。
[組織情報] ウィンドウが表示されます。
7. 組織名を入力します。組織名に特殊文字 (& など) が含まれる場合、各特殊文字の前に ^ を追加します。たとえば、AB&C は AB^&C となります。
注: ここでダブル バイト文字は使用しないでください。
8. [次へ] をクリックします。
[セットアップ タイプ] ウィンドウが表示されます。
9. [標準] を選択し、[次へ] をクリックします。
[デスティネーション フォルダ] ウィンドウが表示されます。
10. [参照] をクリックし、デスティネーション フォルダを選択/作成するダイアログ ボックスを開きます。

- a. デスティネーションフォルダを選択または作成し、[次へ] をクリックします。

[機能の選択] ウィンドウが表示されます。

- b. [次へ] をクリックしてデフォルトの送信先フォルダを使用します。

[機能の選択] ウィンドウが表示されます。

11. 必要とするインストール機能を（Database、Application、Web から）選択し、[次へ] をクリックします。

注: これ以降は、選択した機能に関連するダイアログボックスのみが表示されます。関連付けられた機能が選択されていない場合、ダイアログボックスは表示されません。たとえば、ユーザが [データベース] 機能を選択していなければ、[データベース作成] ダイアログボックスは表示されません。

選択されたサーバ	関連するダイアログボックス
データベース + アプリケーション + Web	[ログオン情報] 、 [データベース作成]
アプリケーション + Web	[ログオン情報] 、 [データベース接続]
データベース	データベース作成
アプリケーション	[ログオン情報] 、 [データベース接続]
Web	[ログオン情報] 、 [ログサーバ設定] 、 [データベース接続]

12. [ログオン情報] ダイアログ ボックスに、CA Business Service Insight によって使用されるユーザ アカウントを入力します。

- a. [新規ユーザ] ボタンをクリックして新規ユーザを作成するためのダイアログ ボックスを開き、[次へ] をクリックして必要に応じて情報を入力します。

注: 後で参照できるように、入力した情報は記録しておいてください。

13. [データベース作成] ダイアログ ボックスで、すべてのフィールドに必要な情報を入力し、[次へ] をクリックします。

[ファイルのコピーの開始] ダイアログ ボックスが表示されます。

14. サードパーティ CD の場所を入力または参照し、[次へ] をクリックします。

注: JBoss がすでにインストールされており、ユーザが新しいバージョンをインストールする場合は、このインストールによって環境変数 "JBoss_HOME" が上書きされます。インストール後、環境変数は新しい JBoss を指すようになります。旧バージョンの JBoss のコンポーネントが検出された場合は、チェック ボックスの選択画面が表示され、クリーンアップするコンポーネントを選択するように指示するメッセージが表示されます。

- a. 前のインストールをクリーンアップするには、チェック ボックスを選択して [次へ] をクリックします。

- b. クリーンアップなしで続行するには、[次へ] をクリックします。

JBoss がインストールされ、完了時に現在の設定が表示されます。

- c. 設定を確認し、[次へ] をクリックします。

[セットアップ ステータス] ウィンドウが表示され、インストールが開始されます。

15. データベースについては、コマンドライン ウィンドウの手順に従います。

インストールが終了すると、インストールに成功したことを知らせる確認ウィンドウが表示されます。

16. プロンプトが表示されたら、[完了] をクリックしてコンピュータを再起動します。

システムが再起動します。

注: [カスタム] を選択している場合は、[デスティネーション フォルダ] ウィンドウが表示されます。カスタム インストール手順を続けるか、[戻る] をクリックして前のダイアログ ボックスに戻ります。

アプリケーション サーバの追加インストール

アプリケーション サーバの追加インストールの方法を以下に示します。これらの手順は、4 台以上のサーバにインストールする場合に限り使用します。

サービスの分配

いくつかのアプリケーション サーバにサービスを分割するときに、これらの手順を実行します。

以下の手順に従います。

1. アプリケーションサーバの [カスタム] インストールを開始します。
2. 最初のアプリケーションサーバをインストールします。
3. [カスタム] インストール手順を使用して、追加のアプリケーションサーバをインストールします。この手順では、必要とされる追加のサービス/機能のみをインストールします。
4. オペレーティングシステムの [サービス] ダイアログボックスを開いて、追加のアプリケーションサーバにインストールされた不要なコンポーネントをクリアするか停止します。

コンポーネント	説明
アダプタ	アダプタ サービス オプション (テキスト ファイル、SQL、マネージャ、正規表現チェッカ) をインストールします。
アダプタ リスナ	アダプタ リスナをインストールします。 注: アダプタ リスナ サービスは 1 回しかインストールできません。
アラート	アラート サービスをインストールします。 注: アラートは 2 回以上インストールしないでください。
ダッシュボード エンジン	ダッシュボード エンジン サービスをインストールします。 注: ダッシュボード エンジン サービスは 1 回しかインストールできません。
ログ サーバ	ログ サーバ サービスをインストールします。
ペナルティ ライタ	ペナルティ サービスをインストールします。
PSL ライタ	計算エンジン サービスの 1 つのインスタンスをインストールします。
レポート スケジューラ	レポート スケジューラ サービスをインストールします。
ACE Engine on JBoss アプリケーションサーバ	ACE2 Manager を実行する JEE アプリケーションサーバ。
Tomcat 6	Apache Tomcat 6.0.32 サーバ (http://tomcat.apache.org)。
Oblisync on JBoss アプリケーションサーバ	[コンテンツ転送] 機能の実行を有効にします。

コンポーネント	説明
ScriptHost	スクリプト ホスト サービスをインストールします。 注: スクリプト ホスト サービスは1回しかインストールできません。
タスク ホスト	タスク ホスト サービスをインストールします。 注: タスク ホスト サービスは1回しかインストールできません。

複数のサーバへのアダプタの配置

アダプタと共にインストールされる各サーバについて、以下の指示に従います。

次の手順に従ってください:

1. カスタム Web サーバインストールを開始します。
2. [機能の選択] ウィンドウに移動し、[Web サイト]、[サービス]、[管理ツール]、および [データベース] 機能をクリアします。

重要: アダプタ サーバでアダプタ リスナを開始しないでください。追加のアプリケーション サーバのうち 1 台にアダプタ リスナが含まれることを確認します。

クライアント インストール - 標準

このセクションでは、クライアントをインストールする手順について説明します。

クライアントはサイレント モードでインストールできます。詳細については、「[サイレントインストール \(P. 89\)](#)」を参照してください。

注: CA Business Service Insight ページは、エンド ユーザのブラウザ上で追加のサードパーティ アプリケーションをインストールする必要があります。これらのアプリケーションは、特定のページ、またはクライアント インストール キットから取得できます。

コンポーネント

この表には、クライアントの HTML ページで使用するためにインストールされる必須コンポーネントのリストを示します。

コンポーネント名	サードパーティ ア プリケーション	使用される機能
タイムスロット エディタ	アプレット	デザイン、ファンデーション エンティティ、タイムスロット テンプレート、タイムスロットの表示
TeeChart Pro	ActiveX	レポート、レポート ウィザード、生成
フローチャート	ActiveX	サービス レベル管理、契約ナビゲータ
スクリプト エディタ	ActiveX	カタログ、テンプレート ライブラリ、ビジネス ロジック テンプレート、ビジネス ロジック テンプレートの追加
DataSourceAnalyzerAX	ActiveX	デザイン、データ取得、アダプタ、新規追加、テキスト ファイル/SQL アダプタ
ActiveQueryBuilderXControls	ActiveX	デザイン、データ取得、アダプタ、新規追加、新規 SQL アダプタの追加

CA Business Service Insight クライアントのインストール

CA Business Service Insight クライアントは、Web サイトにログオンする前に任意のエンドユーザ コンピュータで実行される必要があります。

注：管理者権限を持つユーザがインストールを実行することを確認してください。

次の手順に従ってください：

1. 設定プログラムを実行する前に Windows プログラムをすべて終了します。
2. Cloud_Insight_Client_8.2.5.exe をダブルクリックします。
3. 画面上の手順に従ってください。

インストール後の作業

CA Business Service Insight が正しく機能することを確認するには、これらのタスクを実行します

重要: CA Business Service Insight をインストールしたら、`sadmin/sadmin` ユーザとしてログインし、それからその他のユーザとしてログインします。

以下の手順に従います。

1. 以下の操作を行って、選択したサービスが正しくインストールされていることを確認します。
 - a. [開始] - [実行] をクリックして「`services.msc`」と入力します。
 - b. [OK] をクリックします。
[サービス] ウィンドウが表示されます。
 - c. インストール中に選択したコンポーネントに対応するサービスが正しくインストールされたことを確認します。

注: 各サービスのサーバの場所は、「サービス名」の後に示されます。

サービス名 / サーバ	サービスの説明	サービス カ タログのモ デル化	サービスレベ ルの計算	エンタープライ ズの影響度分 析
ACE 移行サービス	ACE 移行サービスはバージョン 8.2 でインストールされるサービスです。このサービスは、メトリックを ACE1 エンジンから ACE2 エンジンに割り当てるプロセスの間に到着する再計算日付リクエストを検出および設定します。			
アダプタ リスナ (アダプタ) / アプリケーション サーバ	アダプタと通信します。このサービスは、アダプタからデータを読み取り、CA Business Service Insight データベース内に格納します。このサービスとアダプタとの通信は、TCP/IP ソケットを介して実行されます。	いいえ	はい	いいえ

サービス名 / サーバ	サービスの説明	サービスカ タログのモ デル化	サービスレベ ルの計算	エンタープライ ズの影響度分 析
アダプタ展開 (アダプタ) / アプリケーション サーバ	アダプタを作成します。このサービスは、アダプタウィザードからアダプタの作成、更新、または削除リクエストを受信します。このサービスとの通信は、Web サービス インターフェースを介して実行されます。	いいえ	はい	はい
アラート (イベント) / アプリケーション サーバ	システムの各部からイベントを受信します。このサービスは、イベントのデータをシステムのアラート プロファイルのセットと比較します。イベントがアラート プロファイルに一致する場合、サービスはアラートを生成します。サービスはデータベース キューからイベントを受信します。	いいえ	はい	はい
現在のステータス エンジン (ダッシュボード) / アプリケーション サーバ	ダッシュボード上の [現在のステータス] インジケータを計算します。	いいえ	いいえ	はい
ダッシュボードエ ンジン (ダッシュボード) / アプリケーション サーバ	各ダッシュボードエンティティの重大度を計算します。	いいえ	いいえ	はい

サービス名 / サーバ	サービスの説明	サービス カ タログのモ デル化	サービスレベ ルの計算	エンタープライ ズの影響度分 析
ログ サーバ (ログ)	システムの各部からのログ メッセージをデータベース に書き込みます。	はい	はい	はい
/ アプリケーション サーバ	各 CA Business Service Insight コンポーネントは TCP/IP ソ ケットを介してログ サーバ と通信し、メッセージをログ に記録します。			
ペナルティ ライタ / アプリケーション サーバ	後方互換性を提供します。廃 止されたペナルティ ライタ 機能はメトリックを使用し て行われるようになりました。	いいえ	いいえ	はい
PSL Writer (PSL) / アプリケーション サーバ	古いメインの計算エンジン。 システム内の各契約に含ま れる各メトリックのサービ ス レベルを計算します。 スケールアップするには、ア プリケーションサーバ上に 複数の PSL Writer サービスを インストールします。その場 合、通常は「PSL Writer N」と いうサービス名になります。 N は各サービスに指定された 一意の ID です。	いいえ	はい	はい
レポート スケ ジューラ (レポート)	スケジュールされたレポー トを実行します。	いいえ	いいえ	はい
/ アプリケーション サーバ				

サービス名 / サーバ	サービスの説明	サービス カ タログのモ デル化	サービスレベ ルの計算	エンタープライ ズの影響度分 析
PSLWorker <番号> (ACE2) / アプリケーション サーバ	ACE2 メトリックに提供され るサービス レベルを計算し ます。	いいえ	はい	はい
ScriptHost / アプリケーション サーバ	エンジン タスクをホストし ます	はい	はい	はい
Oblisync on JBoss ア プリケーション サーバ (コンテンツ転送)	[コンテンツ転送] 機能の実 行を有効にします。	いいえ	はい	いいえ
/ Web サーバ				
ACE on JBoss アプリ ケーション サーバ / アプリケーション サーバ	JEE アプリケーション サーバ です。ACE2 Manager を実行し ます。	いいえ	はい	はい
Tomcat 6 / アプリケーション サーバ & / Web サーバ	このサービスは、Apache Tomcat 6.0.32 サーバです (http://tomcat.apache.org)。	はい	はい	いいえ

サービス名 / サーバ	サービスの説明	サービス カ タログのモ デル化	サービスレベ ルの計算	エンタープライ ズの影響度分 析
タスク ホスト / アプリケーション サーバ	以下のような非同期のシス テム メンテナンス操作を実 行します。 ■ 有効期限が切れた時点で 契約のステータスを変更 する ■ 不明なイベントの Raw データを分析する ■ 契約が最新かどうかを確 認するインジケータを計 算する。 契約を表示する ときにそのデータを確認 できます。 ■ 「変換スクリプト」を実 行する	はい	はい	はい

1. タイムゾーン用に選択した時間オフセット (GMT からの時間) が、タイムゾーン名の時間オフセットの定義と一致することを確認します。夏時間の期間の開始日と終了日を定義する場合は、選択したタイムゾーンの国で定義されている日付を設定します。
2. リバースプロキシが CA Web サイトに転送するリクエストをサポートするには、プレフィックス文字列を **ProxyPrefix** キー値として入力します (**web.config** ファイルの **AppSettings** セクション)。このプレフィックス文字列は、プロキシ設定で CA Web サイトにリクエストをルーティングするように設定されています。

- a. プロキシの値が正しいスペルで入力され、その前後にスラッシュがあることを確認して (例: `"/prefix/"`)、Web サイトがリバースプロキシに正しくルーティングされるようにします。

たとえば、CA Web サイトにマッピングされたプレフィックスが「ca」の場合、**web.config** ファイルを以下のように更新します。

```
<appSettings>
  <add key="ProxyPrefix" value="/ca/" />
</appSettings>
```

ProxyPrefix キーが存在しない場合やその値が空の文字列の場合、Web サイトは標準モードで動作します。

- b. プロキシ設定にヘッダを追加します。ヘッダキーは以下のように指定する必要があります:
`"X-Forwarded-CA-Oblicore-Proxy"`。

たとえば、Oblicore Web アプリケーションのプロキシアクセス URL が `http://proxy/ca/` の場合 (「ca」はプレフィックス)、**web.config** ファイルは以下のように更新されます。

```
<appSettings>
  <add key="ProxyPrefix" value="/ca/" />
</appSettings>
```

この更新のほかに、以下のキー名の新しいヘッダがプロキシ Web アプリケーション設定に追加されます:

`"X-Forwarded-CA-Oblicore-Proxy"`。

3. (オプション) 3 層インストールの場合、Web サーバのマシン設定を変更します。
 - a. Web サーバ設定管理を開きます。
 - b. [サイト設定]、[詳細]、[キュー] の順に選択します。
 - c. アプリケーションサーバの IP またはアドレスとして、[現在のステータス MSMQ マシン]、[デフォルト MSMQ マシン]、および [ダッシュボード MSMQ マシン] を設定します。

第 4 章: CA Business Service Insight のアップグレード方法

システム管理者は、定期的に **CA Business Service Insight** を更新することが重要です。アップグレードにより、すべての新機能およびバグ修正を利用できます。

アップグレード ファイルはプログラムを実行しているサーバを認識し、必要なファイルを更新します。最初に、**Alerts** サービスが含まれるアプリケーションサーバをアップグレードします。マイグレーション スクリプトは、アラート サービスがインストールされたアプリケーション サーバ上で自動的に実行されます。

マルチサーバ環境にアップグレードするには、最初にアプリケーション サーバでアップグレード処理を実行します。次に、**Web** サーバでアップグレードを実行します。アプリケーションサーバでアップグレードすると、自動的にデータベースマイグレーションが実行されます。

このシナリオを使用し、プロセスについて段階的に説明します。

CA Business Service Insight のアップグレード方法



システム管理者



1. [前提条件の確認](#) (P. 53)。
2. [ファイルとフォルダのバックアップ](#) (P. 53)。
3. [アップグレードの準備](#) (P. 54)。
4. [Web ウェブサイトの存在確認](#) (P. 55)。
5. [CA Business Service Insight のアップグレード](#) (P. 55)。
6. [アップグレードの完了](#) (P. 59)。
7. (オプション) [プロキシ文字列の更新](#) (P. 60)。
8. (オプション) [API の更新](#) (P. 61)。

前提条件の確認

アップグレードの実行が可能であることを確認するには、以下の前提条件を確認します。

- CA Business Service Insight バージョン 7.0 SP1 以降がインストールされている。
- SYSDBA アクセス権限がある。
- データベースの各テーブル スペースに少なくとも 15 パーセントの未割当領域があること。

注: autoextend がオンになっている場合、データ ファイルの maxsize がデータ ファイルの現在のサイズの少なくとも 15 パーセント以上になっていることを確認します。

- データベース テーブルスペースが含まれる各物理デバイスの未割当領域が、デバイスのすべてのテーブルスペースの合計サイズの少なくとも 15 パーセントであること。
- Oracle OLEDB Provider がアプリケーション サーバと Web サーバにインストールされていること。

ファイルとフォルダのバックアップ

アップグレード中に情報を失わないようにするため、以下のファイルとフォルダをバックアップします。

注: ロールバックを実行するには、すべてのバージョンをアンインストールし、前のバージョンをインストールし、バックアップ データをインポートします。

次の手順に従ってください:

1. データベース ダンプを実行します。
2. カスタマイズされたすべてのファイルをバックアップします。以下のファイルがカスタマイズ可能です。
 - LoginCommon.asp
 - RedirectToLogin.asp
 - SilentLogin.asp
 - AcceptLogin.asp
 - Web.config
 - Registry.xml
 - Index.asp (シングル サインオン用)

- logo.jpg
- logo.gif
- logobg.gif
- logout1.gif
- logout2.gif
- Reportlogo (およびダッシュまたはレポート エクスポート など、その他のロゴ)

3. (オプション) 言語パッケージをバックアップします。

アップグレードの準備

アップグレードを確実に成功させるには、アップグレードを開始する前に以下のタスクを実行します。

次の手順に従ってください:

1. 英語でない地域言語設定を使用している場合、英語 (米国) にそれを変更します。

注: アップグレードに別の言語設定を使用した場合、エラーを引き起こす可能性があります。

2. すべての **Oblicore** サービスを停止します。
3. **IIS Manager** で、**Web** サーバを停止します。

重要: **WWW** サービスまたは **IIS Admin** サービスを停止しないでください。

4. 分散トランザクション コーディネータ サービスを開始します。

重要: 分散トランザクション コーディネータ サービスはアップグレード時のみに必要です。

5. **oblicore_privs.sql** を実行します。スクリプトは **SetupDB¥Migration** フォルダのインストール CD にあります。
6. **job_queue_processes** パラメータが **Init.ora** ファイルで 2 に設定されていることを確認します。

Web サイトの存在確認

Web サイトが機能することを確認するには、サーバの Web サイトの存在を確認します。お使いのサーバトポロジに適用されるオプションを選択します。

次の手順に従ってください:

サーバはアプリケーション サーバとしてのみ指定されます。

1. アプリケーション サーバのレジストリを開き、以下のエントリを参照します: HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Oblicore¥Install Data
2. WWWRootFolderLocation 文字列値が存在する場合は、削除します。

サーバがアプリケーション サーバとしてのみ指定されることはありません。

1. Web または Web サービス サーバのレジストリを開き、以下のエントリを参照します: HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Oblicore¥Install Data
2. WWWRootFolderLocation 文字列値が存在することを確認します。
3. この文字列値のデータに Web フォルダのフォルダパスが含まれていることを確認します。

注: 64 ビット システムでは、エントリは次のとおりです:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥WOW6432node¥Oblicore¥Install Data

CA Business Service Insight のアップグレード

CA Business Service Insight の新しい機能を利用するには、最新のバージョンにアップグレードします。

次の手順に従ってください:

1. サーバフォルダの Cloud_Insight_Server_8.2.5.exe をダブルクリックし、[次へ] をクリックします。
2. インストール言語を選択し、[OK] をクリックします。
3. [インストール] をクリックします。
4. インストール ウィザードの [次へ] をクリックします。
5. 使用許諾契約に同意し、[次へ] をクリックします。
6. サードパーティ CD の場所を選択し、[次へ] をクリックします。

7. (オプション) インストーラにより以前の JBoss コンポーネントをクリーンアップする指示が表示された場合は、クリーンアップを選択し、[次へ] をクリックします。

注: JBoss の旧バージョンがインストールされている場合にのみ、このプロンプトが表示されます。

アップグレード ダイアログ ボックスが開きます。

8. 開いたダイアログ ボックスごとに、各パラメータの値を入力し、[次へ] をクリックします。

注: 詳細については、「[アップグレード ダイアログ ボックス \(P. 56\)](#)」を参照してください。

9. 設定が正しいことを確認し、[次へ] をクリックします。

インストールが開始されます。

[マイグレーション スクリプトの実行] を選択した場合、手順に従います。

10. [完了] をクリックしてアップグレードを確定します。

システムが再起動します。

アップグレード ダイアログ ボックス

インストール ウィザードには、情報を更新するために CA Business Service Insight が使用するダイアログ ボックスが含まれます。選択する機能に関連するダイアログ ボックスのみが開きます。

以下の表は、アップグレード ダイアログ ボックスと関連するパラメータおよび値を一覧にまとめたものです。

重要: ダブル ダガー (‡) が付いているエントリにはダブル バイト文字を使用することができません。

注: Oracle の命名規則では、特定の文字の使用がサポートされていません。Oracle の特定の要件 (ASCII など) および制限 (特殊文字やダブル バイト文字など) については、Oracle の資料を参照してください。

ダイアログ ボックス名	パラメータ	値	メモ
データベー ス作成	マイグレーション ス クリプトの実行	選択または選択解除	CA Business Service Insight Alerts サービスが含まれるア プリケーション サーバで自動 的に選択されます。

ダイアログ ボックス名	パラメータ	値	メモ
	Oblicore データベース インスタンス TNS 名	TNSNAMES.ORA ファイル に表示されているとおり に TNS 名を入力します。 ‡	CA Business Service Insight デー タベース インスタンス TNS 名。
	スキーマ ユーザ名	アップグレードするス キーマ ユーザの名前を 入力します。	
	スキーマのパスワー ド	アップグレードするス キーマ ユーザのパス ワードを入力します。	デフォルト : Oblicore
	システム パスワード	システム ユーザ パス ワードを入力します。	
ログイン情 報	ユーザ名	ユーザの名前。 ‡	デフォルト : インストールに 使用するユーザ アカウント。 注 : ユーザおよびパスワード を専用ドメイン アカウントに 変更することをお勧めしま す。
	パスワード	ユーザのパスワード。 ‡	
	〔新規ユーザの情報〕 ボタン	〔新規ユーザ情報〕 行を 参照。	
新規ユーザ の情報	ドメインまたはサー バ	ローカル サーバの名前。	
	グループ	管理人	
	ユーザ名	ユーザの名前。	
	パスワード	ユーザのパスワード。	会社の方針に準拠します。
	パスワードの確認	パスワードの確認。	

設定ファイルとそれに関連したパラメータを以下の表に示します。

重要: 以下の設定テーブルで、いずれのエントリに対してもダブルバイト文字を割り当てないでください。

注: * マークが付いているパラメータの値は、一重引用符で始まり、円記号と一重引用符で終わる必要があります (例: 'C:¥Temp¥')。

設定ファイル	パラメータ	デフォルト値	特記事項
Config_Ini.ini	ORGANIZATION_NAME	組織名	組織名に特殊文字 (& など) が含まれている場合は、その特殊文字の前に ^ 文字を挿入します (たとえば、AB&C の場合は、「AB^&C」と表記します)。
	TEMPLATE_PATH*	'<インストールディレクトリ>¥Export Templates¥'	エクスポートテンプレートフォルダの場所
	BOOKLET_TEMPLATE_PATH*	'<インストールディレクトリ>¥Booklet Templates¥'	ブックレットテンプレートフォルダの場所
	WEB_SERVER	Web サーバの名前	
	DB_NAME		
	OBLICORE_USER		
	OBLICORE_PASS	Oblicore	データベースにおける CA Business Service Insight ユーザ パスワード
	MPX_CONFIGURATION_DIRECTORY*	'<インストールディレクトリ>¥Packages¥Configuration¥'	パッケージ設定フォルダの場所
	MPX_INPUT_DIRECTORY*	'<インストールディレクトリ>¥Packages¥'	パッケージ入力フォルダの場所

設定ファイル	パラメータ	デフォルト値	特記事項
	MPX_LOG_DIRECTORY*	'<インストールディレクトリ >%Packages%Log%'	パッケージログフォルダの場所
	MPX_OUTPUT_DIRECTORY*	'<インストールディレクトリ >%Packages%'	パッケージ出力フォルダの場所
	MPX_TEMP_DIRECTORY*	'<インストールディレクトリ >%Packages%Temp%'	パッケージ一時フォルダの場所

アップグレードの完了

アップグレードを完了するには、以下のタスクを実行します。

重要: CA Business Service Insight をアップグレードした後に **sadmin** としてログインします。デフォルトのパスワードは「**sadmin**」です。

次の手順に従ってください:

1. すべてのサーバを再起動します。
2. IIS Manager で、Web サーバを起動します。
3. (オプション) パブリック シノニムからプライベート シノニムに変更するには、データベースで以下のいずれかのプロシージャを呼び出します。

```
begin
prc_recreate_all_synonyms ('YES');
end
```

または

```
exec prc_recreate_all_synonyms ('YES');
```

4. (オプション) データベースで **oblidbadmin** アカウントをロックします。データベースに接続し、以下のコマンドを実行します。

```
alter user oblidbadmin account lock;
```

5. (オプション) **oblidbadmin** パスワードを変更します。データベースに接続し、以下のコマンドを実行します。

```
alter user oblidbadmin identified by '<new_password>;'
```

6. 選択したタイムゾーンに時間オフセットが一致することを確認します。
7. 夏時間の日付がお住まいの場所に一致することを確認します。

これで CA Business Service Insight が最新のバージョンになりました。

プロキシ文字列の更新

リバース プロキシは Web サイトにサポート リクエストを転送します。 リクエストは `web.config` ファイルの `AppSettings` セクションの `ProxyPrefix` およびキーの値にプレフィックス文字列を入れます。 このプレフィックス文字列は、プロキシ設定で Web サイトにリクエストをルーティングするように設定されています。 リバース プロキシを使用するには、プロキシ文字列を更新します。

次の手順に従ってください:

1. Web サイトがリバース プロキシに正しくルーティングされることを確認します。 プロキシ値のスペルが正しく、2つのスラッシュ間に入力されていること (`"/prefix/"`) を確認します。

たとえば、Web サイトにマッピングされたプレフィックスが「ca」の場合、`web.config` ファイルは以下のように更新されます。

```
<appSettings>
<add key="ProxyPrefix" value="/ca/" />
</appSettings>
```

`ProxyPrefix` キーが存在しない場合やその値が空の文字列の場合、Web サイトは標準モードで動作します。

2. プロキシ設定にヘッダを追加します。ヘッダ キーは、「X-Forwarded-CA-Oblicore-Proxy」と指定する必要があります。

たとえば、Oblicore Web アプリケーションのプロキシアクセス URL が `http://proxy/ca/` の場合 (ca はプレフィックス)、`web.config` ファイルは以下のように更新されます。

```
<appSettings>
<add key="ProxyPrefix" value="/ca/" />
</appSettings>
```

この更新のほかに、「X-Forwarded-CA-Oblicore-Proxy」というキー名の新しいヘッダがプロキシ Web アプリケーション設定ファイルに追加されます。

API の更新

8.1 より前のバージョンの API コードを使用するには、API インターフェースを更新します。

注: 詳細については、「CA Business Service Insight SDK Guide」の「API Backwards Compatibility」を参照してください。

次の手順に従ってください:

1. 8.2.5 の WSDL を使用し、契約サービス、ポートフォリオサービス、リポジトリサービスのプロキシクラスを作成します。最後のインストールからの WSDL を 8.0 より前のバージョンに使用します。
2. API コードを再コンパイルします。

注: コンパイルエラーがある場合、手動で変更する必要があるコードを探します。新しい API に加えられた変更（フィールドの順序や型）に従ってコードを更新します。これらを変更した後で API コードを再コンパイルします。

第 5 章: カスタム インストールの実行

CA Business Service Insight を 3 つ以上のサーバにインストールするには、または CA サポートがこのオプションを推奨する場合、カスタム インストールを実行します。

次の手順に従ってください:

1. [参照] をクリックして送信先フォルダを選択し、[次へ] をクリックします。

注: 別々のサーバに CA Business Service Insight サービスを分配したりアダプタを配置したりするには、「[アプリケーション サーバの追加インストール \(P. 41\)](#)」を参照してください。

2. インストールするコンポーネントを選択して [次へ] をクリックします。以下の表と「[カスタム インストール ダイアログ ボックス \(P. 65\)](#)」を参照しながら、選択した機能に基づくインストール処理を続行します。

選択したサーバ	関連するウィンドウ
データベース	データベース作成
データベース + アプリケーション + Web	[ログオン情報]、[Web サイト設定]、[サービス起動タイプ]、[ログ サーバ設定]、[データベース作成]
アプリケーション	[ログオン情報]、[サービス起動タイプ]、[ログ サーバ設定]、[データベース接続]
アプリケーション + Web	[ログオン情報]、[Web サイト設定]、[サービス起動タイプ]、[ログ サーバ設定]、[データベース接続]
Web	[ログオン情報]、[Web サイト設定]、[ログ サーバ設定]、[データベース接続]

3. 選択が終了すると、[アプリケーションのインストール準備完了] ウィンドウが表示されます。ここまでの設定の内容を確認します。[次へ] をクリックします。

[システムの更新] ウィンドウが表示され、インストールが開始されます。

データベースを作成するように設定した場合は、インストール処理中にコマンドライン ウィンドウが表示されます。

4. 画面上の指示に従ってください。

注: 新しいデータベースを自動的に作成しない場合は、「[新しいデータベースの手動作成 \(P. 31\)](#)」を参照してください。

5. インストールが終了すると、インストールに成功したことを知らせる確認ウィンドウが表示され、コンピュータを再起動するよう求められます (デフォルトでは、「はい」が選択されています)。「完了」をクリックします。システムが再起動します。

カスタム インストール ダイアログ ボックス

以下の表では、インストール中に表示されるカスタム インストール ダイアログ ボックスとその関連情報（パラメータ、値）のリストを示します。

表示される各ダイアログ ボックスで、各パラメータに対する値を入力して[次へ]をクリックします。

注: 選択した機能に関連するダイアログ ボックスのみが表示されます。関連付けられた機能が選択されていない場合、ダイアログ ボックスは表示されません。たとえば、ユーザが[データベース] 機能を選択していなければ、[データベース作成] ダイアログ ボックスは表示されません。

注: ダブル ダガー (‡) が付いているエントリはダブル バイト文字を使用することはありません。

注: Oracle の命名規則では、特定の文字の使用がサポートされていません。Oracle の特定の要件（例: ASCII）および制限（特殊文字、ダブルバイト文字など）については、Oracle の資料を参照してください。

注: 組織名にはダブル バイト文字を含めることができません。

ウィンドウ名	パラメータ	値	特記事項
データベース作成	■ Oracle バージョン	■ デフォルト値:	[ユーザの選択] ウィンドウの使用中に Microsoft 標準の [ネットワーク パスワードの入力] ウィンドウが何度も表示されることがあります。ドメインにログインしていないと、このウィンドウが表示される場合があります。必要に応じて、有効なドメイン ユーザおよびパスワードを入力してドメインにアクセスします。
	■ データベースファイルの場所	■ サーバのデフォルト値	
	■ データベースサーバ名	■ データベースファイルの配置場所 ‡	
	■ 文字セット	■ データベースサーバの名前 ‡	
	■ シノニム	■ UTF8 または MSWIN	
データベース接続		■ Public または Private	
	Oracle バージョン	10 または 11	デフォルト値: サーバのデフォルト値
	CA Business Service Insight データベースインスタンス TNS 名 ‡		TNSNAMES.ORA ファイルに表示されているとおりに TNS 名を入力します。

ウィンドウ名	パラメータ	値	特記事項
ログオン情報	ユーザ名	ユーザの名前	デフォルト値：インストールを実行したアカウントのユーザ。ユーザとパスワードを専用ドメインアカウントに変更することを推奨します。
	パスワード	ユーザのパスワード	
	[新規ユーザの情報] ボタン	[新規ユーザの情報] の行を参照	
ログ サーバ環境設定	ログ サーバ ネットワーク アドレス	ログ サーバがインストールされているアドレス	ログ サーバがローカル ホスト上にない場合は、アドレスを適切なサーバに変更します。 注： アドレスはログ サーバのインストール先のアドレスである必要があります。
	ログ サーバ ネットワーク ポート	ログ サーバで使用されているポート	デフォルト： 4040
新規ユーザの情報	ドメインまたはサーバ	ローカル サーバの名前	
	グループ	管理人	
	ユーザ名	ユーザの名前	
	パスワード	ユーザのパスワード	会社の方針に準拠します。
	パスワードの確認	パスワードの確認	
サービス起動タイプ	自動		システムの起動時に自動的に起動するようにすべてのサービスが設定されます。

ウィンドウ名	パラメータ	値	特記事項
	手動		デフォルト値 : システムの起動時に手動で起動するようにすべてのサービスが設定されます。 注: ログ サーバ サービスは常に [自動] に設定されます。
ログ サーバ環境設定	ログ サーバ ネットワーク アドレス	ログ サーバがインストールされているアドレス	ログ サーバがローカルホスト上にない場合は、アドレスを適切なサーバに変更します。 注: アドレスはログ サーバのインストール先のアドレスである必要があります。
	ログ サーバ ネットワーク ポート	ログ サーバで使用されているポート	デフォルト : 4040
Web サイト設定	WWWRootfolder	WWWRoot フォルダの場所 ‡	デフォルト値 : Web サイトが現在インストールされているフォルダ
	SessionDataFolder	SessionDatafolder フォルダの場所 ‡	デフォルト値 : インストール ディレクトリ
	SessionTimeout	セッションがタイムアウトになるまでの時間	デフォルト : 300

第 6 章：高可用性

このセクションでは、高可用性の概要を提供し、以下の方法について説明します。

- 高可用性環境における CA Business Service Insight の新規インストール。
- 高可用性環境における CA Business Service Insight 8.2.5 へのアップグレード。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[概要](#) (P. 69)

[新規インストール](#) (P. 71)

[旧バージョンからのアップグレード](#) (P. 78)

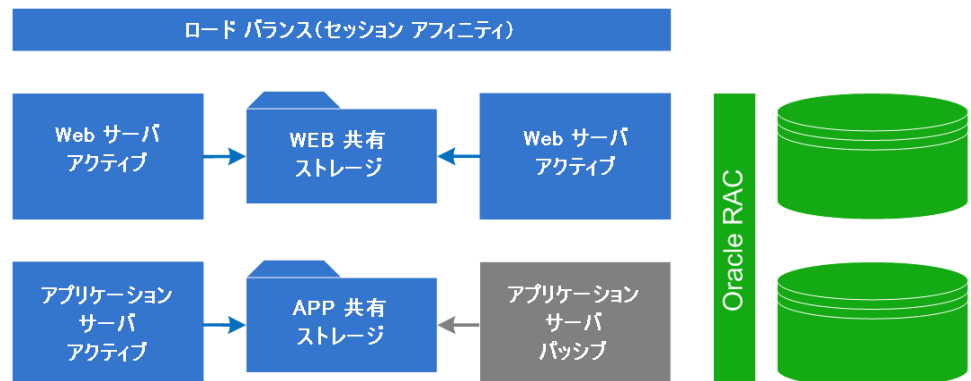
[追加情報](#) (P. 86)

概要

高可用性環境での CA Business Service Insight のインストールは、Windows クラスタテクノロジーおよび Windows ネットワーク負荷分散（NLB）テクノロジーに基づきます。インストールにはアプリケーション、Web およびアダプタ コンポーネントが含まれます。

アプリケーションの各サーバは、以下のソリューションを提示します。

- データベース サーバは顧客から提供され、通常は Oracle RAC 展開です。
- アプリケーション サーバは Active/Passive として展開されます。
- Web サーバは、Web セッション アフィニティを用いた負荷分散を利用して、Active/Active として展開されます。



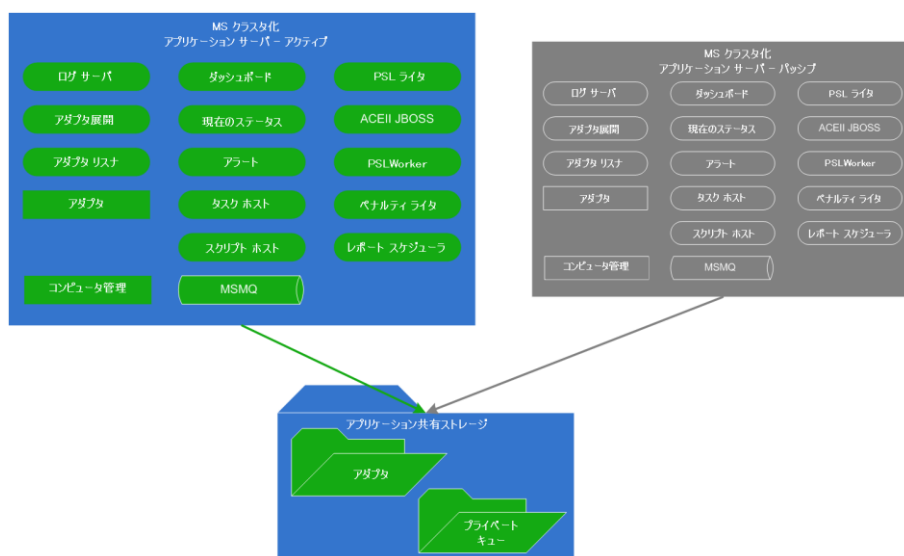
Web サーバおよびアプリケーション サーバの両方は、ノード間のファイルを共有するために高可用性を持つ共有ファイル システムを要求します。このシステムは顧客によって、高可用性の要求に応じるあらゆるストレージのオペレーティング環境で提供されます。

データベース サーバ

Oracle データベースのみがサポートされています。高可用性を構成するには Oracle RAC を展開します。

アプリケーション サーバ

アプリケーション サーバはアクティブ/パッシブ モードで展開されます。これは、いずれの時点でも、アプリケーション サーバ上で実行されているサービスが、複数のサーバのうちの 1 つでのみ実行されることを意味します。



基本の高可用性インフラストラクチャは、アクティブ サーバからパッシブ サーバへのサービスのフェールオーバーを実行するよう設定されます。

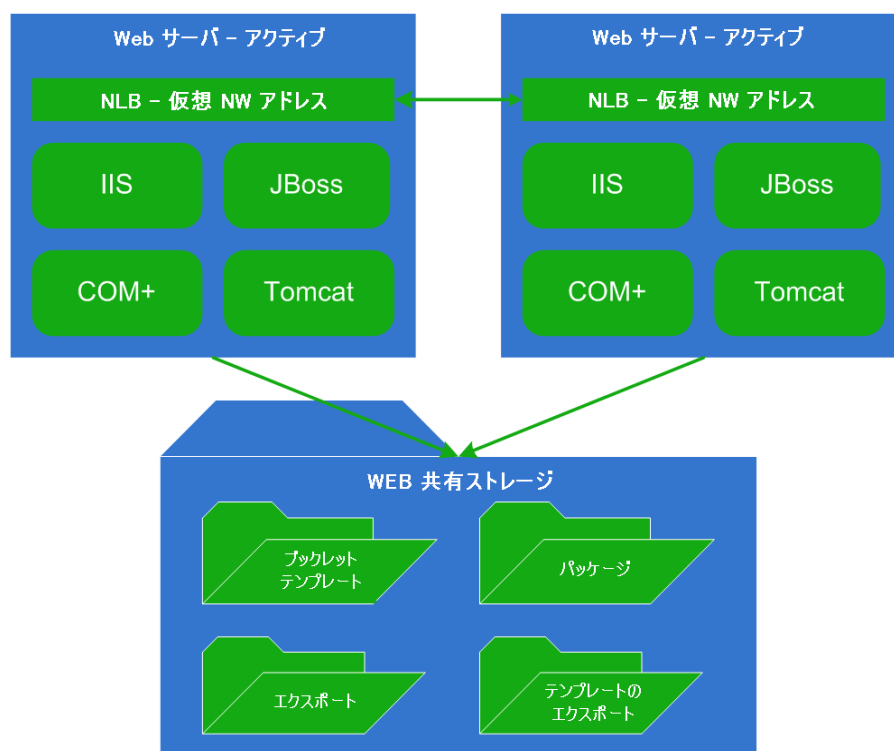
アプリケーション サーバ内の共有データはアダプタ設定、状態ファイル、および MSMQ データ ファイルから構成されます。

Web サーバ

Web サーバは **Active/Active** として展開されます。これは、すべての **Web** サーバが同時にアクティブであり、必要に応じてクライアントとして対応することを意味します。

Web サーバは IIS セッションにデータを格納するため、NW 負荷分散は Web サーバをクライアントに割り当てる際にアフィニティを使用する必要があります。大半のロードバランサはこの機能をサポートします。

Tomcat の下で実行されている **SMI GUI** コンポーネントは、従来の **Oblicore Web** サーバによって使用される状態を使います。



新規インストール

このセクションでは、Windows 2008 オペレーティング環境における高可用性環境で、CA Business Service Insight を新規インストールする方法について説明します。

前提条件

このセクションは、高可用性環境で CA Business Service Insight を新規インストールするための前提条件を示します。

1. すべてのサーバ用の前提条件がすべて準備されていることを確認します。詳細については、標準の「前提条件」を参照してください。
2. 新しいデータベースの作成 詳細については、「[新しいデータベースの手動作成](#) (P. 31)」を参照してください。
3. 割り当てられた DNS 名を持つ 4 つの静的 IP アドレスを準備します。

アプリケーション サーバのインストール。

このセクションでは、アプリケーション サーバをインストールする方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 1 台目の CA Business Service Insight アプリケーション クラスタ ノードマシンに接続します。
2. CA Business Service Insight のインストールを実行します。（「標準インストールの実行」を参照してください。）
3. 1 台目のアプリケーション クラスタ ノードマシンを再起動します。
4. 各アプリケーション クラスタ ノードマシンで、手順 1-3 を繰り返します。

Web サーバのインストール

このセクションでは、Web サーバをインストールする方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 1 台目の Web クラスタ ノードマシンに接続します。
2. CA Business Service Insight のインストールを実行します。（「標準インストールの実行」を参照してください。）
3. 1 台目の Web クラスタ ノードマシンを再起動します。
4. 各 Web クラスタ ノードマシンで、手順 1-3 を繰り返します。

アダプタ サーバのインストール

このセクションでは、CA Business Service Insight アダプタ サーバをインストールする方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 1 台目のアダプタ クラスタ ノードマシンに接続します。
2. CA Business Service Insight のインストールを実行します。（「カスタムインストールの実行」を参照してください。）
3. 1 台目のアダプタ クラスタ ノードマシンを再起動します。
4. 各アダプタ クラスタ ノードマシンで、手順 1-3 を繰り返します。

設定

新規インストールを行った後、アプリケーションサーバ、Web サーバ、およびアダプタ サーバ上で以下のアクティビティを実行します。

注: 設定に 4 つの IP アドレスが利用可能であることを確認します（前提条件に記載されているとおり）。

設定: アプリケーション サーバ

このセクションでは、CA Business Service Insight アプリケーション サーバの設定アクティビティについて説明します。

以下の手順に従います。

1. フェールオーバー クラスタ管理プログラムを開きます。
2. コンソール ツリーの [サービスとアプリケーション] をクリックします。
3. [その他のアクション] から [空のサービスまたはアプリケーションの作成] をクリックします。
4. 以下のグループを作成します。
 - CA Business Service Insight、サービス
 - CA Business Service Insight、現在のステータス
 - CA Business Service Insight、ACE1 Writer
 - CA Business Service Insight、ACE2 Worker
5. CA Business Service Insight サービス グループをクリックします。
6. [リソースの追加] - [ジェネリック サービス] に移動し、ドロップダウン リストから以下のリソースを追加します。 リソースを選択し、次に [終了] をクリックします。
 - Oblicore - Tomcat 6
 - Oblicore - ACE2 on JBoss アプリケーション サーバ
 - Oblicore - アダプタ リスナ
 - Oblicore - アラート
 - Oblicore - ダッシュボード エンジン
 - Oblicore - ログ サーバ
 - Oblicore - PenaltyWriter
 - Oblicore - ScriptHost
 - Oblicore - タスク ホスト
 - Oblicore - レポート スケジューラ
7. CA Business Service Insight サービス グループをクリックします。
8. [リソースの追加] - [クライアントアクセス ポイント] に移動し、ネットワーク名および IP アドレスの入力を入力します。この操作にはしばらく時間がかかります。設定が完了するまで終了させないでください。
9. [次へ] - [次へ] - [終了] をクリックします。
10. リスト内の各リソースについて、これらの手順を実行します。

- a. リソースをダブルクリックします。
- b. [依存関係] タブに移動します。
- c. アクセス ポイント ネットワーク名を選択して、[OK] をクリックします。
 - Oblicore - Tomcat 6
 - Oblicore - ACE2 on JBoss アプリケーション サーバ
 - Oblicore - アダプタ リスナ
 - Oblicore - ダッシュボード エンジン
11. Oblicore - Current_Status_Engine リソースを CA Business Service Insight- 現在のステータス グループに追加します。
12. Oblicore - PSLWriter リソースを CA Business Service Insight - ACE1 Writer グループに追加します。
13. リソースを作成し、追加の各 PSiWriter サービスの CA Business Service Insight ACE1 Writer グループに追加します。
14. Oblicore - PslWorker1 リソースを CA Business Service Insight - ACE2 Worker グループに追加します。
15. メッセージキュー サービスを以下のとおり追加します。
 - a. フェールオーバー クラスタ管理プログラムを開きます。
 - b. コンソール ツリーに移動し、[サービスとアプリケーション] をクリックします。
 - c. [サービスまたはアプリケーションの構成] をクリックします。高可用性ウィザードが表示されます。
 - d. [メッセージキュー] を選択して、[次へ] をクリックします。
[クライアント アクセス ポイント] ページが表示されます。
 - e. [名前] に値を入力し、[アドレス] に利用可能な IP アドレスを入力して、[次へ] をクリックします。
[記憶域の選択] ページが表示されます。
 - f. ディスク リソースをクリックし、[次へ] をクリックします。
[確認] ページが表示されます。
 - g. [次へ] をクリックします。
[概要] ページが表示されます。
 - h. [完了] をクリックします。
 - i. サーバー マネージャを開きます。[機能] - [メッセージ] - [専用キュー] に移動します。各アプリケーション ノードマシンで、[専用キュー] ストレージフォルダで見つかったすべてのキューを削除します。

- j. フェールオーバー クラスタ管理プログラムを開きます。 [メッセージ キュー サービス] を右クリックし、 [メッセージ キュー] - [専用キュー] を開きます。 各アプリケーション ノード マシンで、 [専用キュー] ストレージ フォルダで見つかったすべてのキューを削除します。
- k. [メッセージ キュー サービス] を右クリックし、 [MSMQ の管理] - [メッセージ キュー] - [専用キュー] を開きます。 [専用キュー] をクリックし、以下を作成します。

- OG アラート
- OG アダプタ リスナ
- OG ダッシュボード
- OG 現在のステータス

- l. データベース内のキュー アクセス ネットワーク名を、MSMQ クラスタ化 ネットワーク アドレスに更新します。 このプロセスは、 [管理] - [サイト設定] - [詳細] - [キュー] に移動して、CA Business Service Insight UI により実行することができます。

[キュー] ウィンドウが表示されます。

次のパラメータがリスト表示されます: 現在のステータス MSMQ マシン、ダッシュボード MSMQ マシン、デフォルト MSMQ マシン。 必要に応じて値を更新します。

- 16. すべてのリソースをオンラインにします。

設定: Web サーバ

使用する重要なテンプレートおよび事前定義済みコンテンツを Web サーバにロードするために、以下の設定を実行する必要があります。

注: ネットワーク負荷分散を作成するには、Microsoft TechNet ガイドの手順 ([http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc754833\(WS.10\).aspx](http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc754833(WS.10).aspx)) に従います。

以下の手順に従います。

- 1. [Program Files] - [Oblicore] を選択します。
- 2. ブックレット テンプレート フォルダ、エクスポートのテンプレート フォルダ、およびパッケージ フォルダを Web 共有フォルダにコピーします。
- 3. GUI から更新します。 メニューから [管理] - [サイト設定] - [詳細] - [レポート] - [ブックレットのパス] をクリックします

設定: アダプタ サーバ

以下の設定アクティビティ以下の設定アクティビティが CA Business Service Insight アダプタ サーバ上で実行される必要があります。

以下の手順に従います。

1. 1 台目の CA Business Service Insight アダプタ クラスタ ノードマシンに接続します。
2. フェールオーバー クラスタ管理プログラムを開きます。
3. コンソール ツリー内で、[サービスおよびアプリケーション] をクリックします。
4. [その他のアクション] から [空のサービスまたはアプリケーションの作成] をクリックします。
5. [Oblicore - アダプタ展開] をクリックします。
6. [その他のアクション] - [リソースの追加] - [ジェネリック サービス] から、Oblicore – アダプタ展開リソースを追加します。
7. ¥Program Files¥Oblicore¥Adapters and copy the SqlAdapter.exe に移動し、ディスク S 上のアダプタ フォルダ（クラスタ化された共有フォルダ）にファイル SqlAdapter.exe および TextFileAdapter.exe をコピーします。
8. レジストリ エディタを開き、[HKEY_LOCAL_MACHINE] - [SOFTWARE] - [Oblicore] - [アダプタ] に移動します。AdaptersDir 文字列に値 S:¥Adapters が含まれることを確認します。含まれていない場合、この値に変更します。
9. 各アダプタ クラスタ ノードマシンで、手順 8 を繰り返します。
10. リソースを右クリックし、[このリソースをオンラインにする] を選択します。

旧バージョンからのアップグレード

このセクションでは、Windows 2003 オペレーティング環境における高可用性環境で CA Business Service Insight にアップグレードする方法について説明します。

プロセスはアプリケーション サーバ、Web サーバ、次にアダプタ サーバのシーケンスで処理されます。

注:

- アプリケーション サーバの適切なフェールオーバーのために十分なプロセスおよびセッションがデータベース サーバで定義されていることを確認します。非高可用性環境に関してはプロセスおよびセッションを 2 倍にすることを推奨します。
- 前述のとおり、アップグレード処理はシーケンスに沿って実行されます。そのため、この処理は同時に実行せず、1 度にマシン 1 台ずつアップグレードを実行します。

アプリケーション サーバのアップグレード

このセクションでは、アプリケーション サーバをアップグレードする方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. **CA Business Service Insight** インストール ガイド ドキュメントに記載されているとおり、すべての前提条件の手順を実行します。（旧バージョンからのアップグレードを参照してください。）
2. 1 台目のアプリケーション クラスタ ノードマシンに接続します。
3. クラスタ アドミニストレータ プログラムを開きます。
4. [操作] で、[クラスタへの接続を開く] を選択します。
5. [クラスタまたはサーバ名] で、アプリケーション クラスタ名を選択して [OK] をクリックします。
6. クラスタ グループおよび共有フォルダ上で、最初のアプリケーション クラスタ ノードがすべての **Oblicore** サービスの所有者であることを確認します。
7. 各 **CA Business Service Insight** サービスのクラスタ化グループを右クリックして、[オフラインにする] を選択します。
8. 共有フォルダを右クリックして、[オフラインにする] を選択します。
9. クラスタ グループがオンラインであり、最初のアプリケーション クラスタ ノードが所有者であることを確認します。
10. **CA Business Service Insight** のインストールを実行します。（旧バージョンからのアップグレードを参照してください。）
11. 1 台目のアプリケーション クラスタ ノードマシンを再起動します。
12. 各アプリケーション クラスタ ノードマシンで上記手順を繰り返し、これが所有者であることを確認します。

Web サーバのアップグレード

このセクションでは、Web サーバをアップグレードする方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. すべての前提条件の手順を実行します。（HA の「[前提条件](#) (P. 72)」を参照）。
2. 1 台目の Web ノードマシンに接続します。
3. CA Business Service Insight のインストールを実行します。（旧バージョンからのアップグレードを参照してください）。
4. 1 台目の Web ノードマシンを再起動します。
5. 各 Web ノードマシンで、手順 1-4 を繰り返します。

アダプタ サーバのアップグレード

このセクションでは、CA Business Service Insight アダプタ サーバをアップグレードする方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 1 台目の CA Business Service Insight アダプタ クラスタ ノードマシンに接続します。
 2. クラスタ アドミニストレータ プログラムを開きます。
 3. [アクション] で [クラスタへの接続を開く] 選択します。
 4. クラスタまたはサーバでアダプタ クラスタ名を選択し、[OK] をクリックします。
 5. クラスタ グループおよび共有フォルダ上で、最初のアダプタ クラスタ ノードがすべての Oblicore サービスの所有者であることを確認します。
 6. クラスタ グループおよび共有フォルダがオンラインであることを確認します。
 7. すべてのアダプタ サービスをオフラインにします。
 8. CA Business Service Insight のインストールを実行します。（「CA Business Service Insight へのアップグレード」を参照してください）。
- 注: 分散トランザクション コーディネータ サービスが開始されていないというメッセージが表示された場合、[無視] をクリックします。
9. 1 台目のアダプタ クラスタ ノードマシンを再起動します。
 10. 各アダプタ クラスタ ノードマシンで、手順 2-8 を繰り返します。現在のアダプタ クラスタ ノードが所有者であることを確認します。

サーバの設定

アップグレード後に、アプリケーションサーバ、Web サーバ、およびアダプタサーバで以下のアクティビティを実行します。

アプリケーション サーバの設定

アプリケーション サーバで、以下の設定をリストされた順に実行する必要があります。 どの手順もスキップしないでください。

ここでは **MSMQ** キューを設定します。

以下の手順に従います。

1. 各 **CA Business Service Insight** アプリケーション ノードマシンで、[専用 キュー] ストレージフォルダで見つかったすべてのキューを削除します。
2. 以下のとおり、クラスタで動作するよう **MSMQ** を設定します。（詳細については、**Microsoft** の **Web** サイトを参照してください。）
3. **MSTDC** リソースがクラスタ化されていることを確認します。
4. クラスタ アドミニストレータ プログラムを開くことにより、**MSMQ** リソース およびグループ（仮想サーバ）の作成および設定を行います。
5. [操作] で、[クラスタへの接続を開く] を選択します。
6. [クラスタまたはサーバ名] で、アプリケーション クラスタ名を選択します。
7. コンソール ツリー内で、[クラスタ グループ] をクリックします。

このセクションでは **MSMQ** リソースを追加します。

以下の手順に従います。

1. [ファイル] - [新規] - [リソース] に移動します。
2. 新しいリソース ウィザードで、[名前] に「クラスタ化 **MSMQ**」と入力します。
3. [リソース タイプ] リスト ボックスで、[メッセージ キュー] を選択し、[次へ] をクリックします。
4. [実行可能な所有者] ページで、[次へ] をクリックします。
5. [依存関係] ページの利用可能なリソースの下から、タイプがネットワーク名であるリソースを選択して [追加] をクリックします。
6. ディスク S（タイプが物理ディスクのリソース）を選択し、[追加] をクリックします。
7. [完了] をクリックします。

このセクションでは一般リソースを追加します。

以下の手順に従います。

1. 「クラスタ化 MSMQ」 リソースをオンラインにします。
2. コンソール ツリー内で、[クラスタ グループ] をクリックします。
3. [ファイル] - [新規] - [リソース] に移動します。
新しいリソース ウィザードが開きます。
4. [名前] に「クラスタ化コンピュータの管理」と入力します。
[リソースの種類] リスト ボックスが表示されます。
5. [汎用アプリケーション] を選択し、[次へ] をクリックします。
[実行可能な所有者] が表示されます。
6. [次へ] をクリックします。
7. [依存関係] ページが表示されます。
8. [利用可能なリソース] に移動し、種類が [ネットワーク名] のリソースを選択し、[追加] をクリックします。
9. 「クラスタ化 MSMQ」 リソースを選択し、[追加] をクリックします。
10. [次へ] をクリックします。
11. コマンドラインで「mmc compmgmt.msc」と入力します。
12. 現在のディレクトリで「%windir%\system32」と入力します。
13. [ネットワーク名をコンピュータ名に使用する] チェック ボックスと [デスクトップとの対話をアプリケーションに許可する] チェック ボックスをオンにします。
14. [次へ] をクリックしてから、[終了] をクリックします。
15. 「クラスタ化コンピュータの管理」 リソースをオンラインにします。
[コンピュータの管理] コンソールが表示されます。

コンピュータの管理を表示するには、コンソール セッション (セッション 0) にログオンする必要があります。クラスタ化環境における MSMQ キューの管理には、MMC.V.exe も使用できます。詳細については、Microsoft の Web サイトを参照してください。

このセクションでは専用キューを設定します。

以下の手順に従います。

注: このプロセスは、6.1 SR3 または 6.3 SR4 からアップグレードする場合にのみ適用されます。

1. 開いている [コンピュータの管理] コンソールから、[サービスとアプリケーション] - [メッセージキュー] - [専用キュー] に移動し、以下の 4 つの専用キューを作成します。
 - OG アラート
 - OG アダプタ リスナ
 - OG ダッシュボード
 - OG 現在のステータス
2. データベース内のキュー アドレスを、MSMQ クラスタ化ネットワーク アドレスに更新します。 [管理] - [プリファレンス] - [詳細] - [キュー] に移動して、CA Business Service Insight の UI からアップグレードを実行します。 [キュー] ウィンドウが表示されます。
3. クラスタ アドミニストレータ プログラムを開きます。
4. [操作] で、[クラスタへの接続を開く] を選択します。
5. [クラスタまたはサーバ名] で、アプリケーション クラスタ名を選択します。
6. コンソール ツリー内で、[グループ] をクリックします。
7. [ファイル] - [新規] - [グループ] に移動します。
8. 以下のグループを作成します。
 - CA Business Service Insight - サービス
 - CA Business Service Insight - 現在のステータス
 - CA Business Service Insight - ACE1 Writer
 - CA Business Service Insight - ACE2 Worker
 - クラスタ グループ
9. CA Business Service Insight サービス グループをクリックします。

このセクションでは、必要な内部機能リソースを CA Business Service Insight に追加します。

以下の手順に従います。

注: ほとんどのリソースは存在しますが、古いグループ名が付けられています。グループを改訂して、新規インストールの名前と同じ名前にします。

1. [ファイル] - [新規] - [リソース] に移動します。以下のリソースを追加します。
 - Oblicore - Tomcat 6
 - Oblicore - ACE2 on JBoss アプリケーション サーバ

- Oblicore - アダプタ リスナ
 - Oblicore - アラート
 - Oblicore - ダッシュボード
 - Oblicore - ログ サーバ
 - CA Business Service Insight - サービス FQDN
 - Oblicore - PenaltyWriter
 - Oblicore - ScriptHost
 - Oblicore - タスク ホスト
 - CA Business Service Insight - サービス パブリック クラスター IP
 - Oblicore - ReportsScheduler
2. Oblicore - Current_Status_Engine リソースを CA Business Service Insight- 現在のステータス グループに追加します。
 3. Oblicore - PSLWriter リソースを CA Business Service Insight-ACE1 Writer グループに追加します。
 4. Oblicore - Current_Status_Engine リソースを CA Business Service Insight-ACE2 Worker に追加します。
 5. Oblicore - PslWorker1 リソースを CA Business Service Insight - ACE2 Worker グループに追加します。
 6. すべてのリソースをオンラインにします。

Web サーバ設定

以下の設定アクティビティを Web サーバ上で実行する必要があります。

注: ネットワーク負荷分散を作成するには、Microsoft TechNet ガイドの手順 ([http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc754833\(WS.10\).aspx](http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc754833(WS.10).aspx)) に従います。

以下の手順に従います。

1. [プログラム ファイル] - [Oblicore] に移動します。
2. ブックレット テンプレート フォルダ、エクスポートのテンプレート フォルダ、およびパッケージ フォルダを Web 共有フォルダにコピーします。
3. GUI から更新します。メニューから [管理] - [サイト設定] - [詳細] - [レポート] - [ブックレットのパス] をクリックします

アダプタ サーバの設定

CA Business Service Insight アダプタ サーバが CA Business Service Insight の他の機能と同期できるようにするために、CA Business Service Insight アダプタ サーバ上で以下の設定アクティビティを実行する必要があります。

以下の手順に従います。

1. 1 台目の CA Business Service Insight アダプタ クラスタ ノード マシンに接続します。
2. クラスタ アドミニストレータ プログラムを開きます。
3. [パラメータ] タブ内の Oblicore - AdapterDeployment サービス名を AdapterDeployment に変更します。
4. ¥Program Files¥Oblicore¥Adapters and copy the SqlAdapter.exe に移動し、ディスク S 上のアダプタ フォルダ（クラスタ化された共有フォルダ）にファイル SqlAdapter.exe および TextFileAdapter.exe をコピーします。
5. レジストリ エディタを開き、[HKEY_LOCAL_MACHINE] - [SOFTWARE] - [Oblicore] - [アダプタ] に移動します。 AdaptersDir 文字列に値 S:¥Adapters が含まれることを確認します。 含まれていない場合、この値に変更します。
6. すべてのアダプタ サービスをオンラインにします。

追加情報

このセクションには、インストール処理を補足する追加情報が含まれます。これには、以下のようなものがあります。

- 高可用性を構成する設定可能なパラメータについて説明するテーブル。
- 既知の問題。

高可用性を構成する設定可能なパラメータ

以下のテーブルは、高可用性を構成する設定可能なパラメータを示します。[管理] - [サイト設定] - [詳細] - [設定] からパラメータにアクセスし、エンティティを選択します。パラメータは、新規インストールおよびアップグレードの両方が対象です。

エンティティ	値
SMI アプリケーション サーバ	アプリケーション サーバ内の Tomcat 共有ネットワーク IP アドレス

管理	アプリケーション サーバ内の Tomcat 共有ネットワーク IP アドレス
ACE2	アプリケーション サーバの共有アドレス
アダプタ ウィザード	アプリケーション サーバの共有アドレス
キュー (MSMQ マシンの現在のステータス、ダッシュボード MSMQ マシン、デフォルト MSMQ マシン)	アプリケーション サーバの共有アドレス
レポート	共有ストレージフォルダ/ブックレットのパスの場所
システム	WEB NLB アドレス

既知の問題

高可用性がコンテンツ転送機能（コンテンツ転送、インポート、エクスポート、パッケージ）をサポートしないという既知の問題があります。

解決策として、以下の手順に従って特定の Web サーバと直接的に連動させます。この Web サーバが失敗した場合、設定を変更して別のサーバと連動させます。

1. コンテンツ転送用に指定された Web サーバのうちいずれかを選択して、特定のサーバを設定します。ロード バランサからのみでなく、直接アクセス可能であることを確認します。
2. 選択された Web サーバ上で、Oblicore – Oblisync on JBoss アプリケーションサーバをオンにして、[自動] に設定します。
3. Web ブラウザが選択された Web サーバ上の JBoss サービスを指すよう設定します。
4. CA Business Service Insight UI から、[管理] - [サイト設定] - [詳細] - [設定] - [コンテンツ転送] をクリックします。
5. コンテンツ転送サーバのパラメータ値が、手順 1 で選択されたサーバを指すように変更します。次の形式を使用します：
`http://ServerName:8180/ObliSyncApi/services/ObliSync.wsdl`
6. データベース内の次のパラメータを設定します： `t_system_configurations`。

エンティティ	値
configuration_directory	<インストール ディレクトリ>Packages¥Configuration¥
input_directory	<インストール ディレクトリ>Packages¥

エンティティ	値
log_directory	<インストール ディレクトリ>Packages¥Log¥
output_directory	<インストール ディレクトリ>Packages¥
temp_directory	<インストール ディレクトリ>Packages¥Temp¥

注: パッケージがエクスポート済みである場合、失敗したサーバから別のサーバにパッケージを移動させます。

第 7 章: サイレント インストール

このセクションでは、サーバおよびクライアントのサイレント インストールの手順を説明します。

サイレント インストールでは、インストール中にメッセージまたはウィンドウが表示されません。代わりに、サイレント インストールでは応答ファイルからの入力を読み取るため、ユーザの入力は必要ありません。

特定の **CA Business Service Insight** サーバ（たとえば **Web** サーバ）をインストールするために各サーバ応答ファイルが使用され、それには **.iss** 応答ファイルに詳細が記述された機能のセットが含まれます。たとえば、**My_Web_Server_File.iss** などです。特定のファイルを使用し、応答ファイルに記録されている機能以外はインストールまたは変更できません。

.iss 応答ファイルを使用して、ファイル内に記述されている特定の機能を持つサーバをインストールできる回数には、制限がありません。別の機能または別のタイプの **CA Business Service Insight** サーバをインストールするには、応答ファイルを使用して別の **.iss** ファイルを作成します。

注: **CA Business Service Insight** インストール フォルダには、**.iss** ファイルの例が含まれます。これらのファイルは、例にすぎません。**CA Technologies** では、実際のサイレント インストールのためにこれらのファイルを編集したり使用したりすることは推奨していません。

注: サイレント インストールは、通常のインストールにしか使用できません。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[サーバのサイレント インストール](#) (P. 90)

[アプリケーションサーバサイレント インストール \(アップグレード\)](#) (P. 98)

[クライアントのサイレント インストール](#) (P. 102)

サーバのサイレント インストール

サーバのサイレント インストールでは、InstallShield サイレント応答ファイル (.iss ファイル) から入力を受信されます。InstallShield のサイレント インストールは応答ファイルから入力を読み取り、ユーザからの入力なしでインストールを実行します。.iss ファイルの内部形式は .ini ファイルと似ていますが、拡張子は .iss です。

このセクションでは、新規インストールのサーバ サイレント インストールについて説明します。

注: サイレント インストールは、通常のインストールにしか使用できません。

サーバ応答ファイルの記録

このセクションでは、サーバ応答ファイルを記録する方法について説明します。サーバ応答ファイルには、記録されたインストール中に選択された内容へのすべての応答が含まれます。サイレントインストールでは、通常のインストール処理でのダイアログ ボックスへのユーザ入力の代わりに、記録された応答を入力として使用します。

重要: サーバ応答ファイルの記録を開始する前に、サーバ応答ファイルの記録に使用する各サーバで **MSTDC** サービスが開始されていることを確認してください。

- **MSTDC** サービスが開始されていない場合は、手動で開始する必要があります。

重要: サーバインストールをサイレントモードで実行する前に、**CA Business Service Insight** をインストールするサーバで **MSTDC** サービスが開始されていることを確認してください。

- **CA Business Service Insight** をインストールするサーバ（サーバ応答ファイルを使用するサーバ）で **MSTDC** サービスが開始されていない場合、インストール手順を開始する前に、**MSTDC** サービスを手動で開始する必要があります。

例: サーバ応答ファイルの記録

すべてのインストール ダイアログ ボックスに対する応答を記録するために、以下のコマンドをコマンド ラインから入力します。InstallShield により、設定の選択内容がすべて **Setup.iss** ファイルに記録され、デフォルトで **Windows** フォルダに配置されます。

```
Cloud_Insight_Server_8.2.5.exe /r
```

注: (オプションの手順) 応答ファイルのデフォルトの名前および場所を使用しないようにするには、コマンド **Cloud_Insight_Server_8.2.5.exe /r /f1"<location and name of answer file>.iss"** を実行します。

例: **Cloud_Insight_Server_8.2.5.exe /r /f1"c:¥Silent¥my_server_answer_file.iss"**。

注: サーバ機能を変更するには、別のサーバ応答ファイルを記録します（「[機能の変更](#) (P. 94)」を参照）。

サーバ応答ファイルの例

応答ファイルの例の内容を以下に示します。 サンプル応答ファイルが
Server/Silent サンプル ファイル フォルダに別途用意されています。

```
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-DlgOrder]
Dlg0={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdWelcome-0
Dlg0={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-CheckWindowsService-0
Count=13
Dlg1={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdLicense2-0
Dlg2={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdOrganizationDlg-0
Dlg3={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SetupType2-0
Dlg4={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdAskDestPath-0
Dlg5={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-TypicalFeatureInstallldlg-0
Dlg6={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdLogonUserInformation-0
Dlg7={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SelectDir-0
Dlg8={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-RunDBInstallldlg-0
Dlg9={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdStartCopy-0
Dlg10={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-MessageBox-0
Dlg11={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdFinishReboot-0
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-CheckWindowsService-0]
CHECK_SERVICE_IGNORE=1
CHECK_SERVICE_RETRY=0
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdWelcome-0]
Result=1
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdLicense2-0]
Result=1
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdOrganizationDlg-0]
ORGANIZATIONNAME=CA
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SetupType2-0]
Result=304
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdAskDestPath-0]
szDir=C:\Program Files (x86)\CA\Cloud Insight\
Result=1
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-TypicalFeatureInstallldlg-0]
DBFEATURE=1
APPFEATURE=1
WEBFEATURE=1
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdLogonUserInformation-0]
USERNAME=ISTA0BCMI13\Administrator
PASSWORD=my_password
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SelectDir-0]
Result=1
szDir=C:\ins
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-RunDBInstallldlg-0]
SERVER_NAME=ins
DB_FILE_LOCATION=C:\ins
ORACLE_VERSION=11
DB_CHARSET=UTF8
DB_SYNONYM=Public
```

```
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}]-SdStartCopy-0]
Result=1
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}]-MessageBox-0]
Result=1
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}]-SdFinishReboot-0]
Result=6
BootOption=3
```

会社名の変更

このセクションでは、手動での会社名の入力または変更の方法について説明します。会社名はログオン中に使用されます。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}]-SdOrganizationDlg-0]
ORGANIZATIONNAME=<組織名>
2. パラメータ <組織名> を、会社名に変更します。

ディレクトリの変更

このセクションでは、インストール ディレクトリを手動で別のディレクトリに変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}]-SdAskDestPath-0]
szDir=<ドライブおよびフォルダ>
2. パラメータ <ドライブおよびフォルダ> を目的のドライブおよびフォルダに変更します。

機能の変更

このセクションでは、機能の変更応答ファイルを作成して使用することにより、既存のインストールでの CA Business Service Insight の機能を変更する方法について説明します。

例: 機能の変更ファイルの記録

機能の変更に関する応答を記録するために、コマンドラインから以下のコマンドを入力します。

```
Cloud_Insight_Server_8.2.5.exe /r
```

InstallShield により、設定の選択内容がすべて Setup.iss ファイルに記録され、デフォルトで Windows フォルダに配置されます。

注: 応答ファイルのデフォルトの名前および場所を使用しない場合は、以下のコマンドを実行します。

```
Cloud_Insight_Server_8.2.5.exe /r /f1"<location and name of answer file>.iss".
```

例:

```
Cloud_Insight_Server_8.2.5.exe /r f1"c:%$Silent%change_features_server.iss"
```

注: 特定のインストールの機能を変更するには、別のサーバ応答ファイルを記録します。

注: 応答ファイルは各インストールに固有のもので、各ファイルに含まれる特定の機能セットのみをインストールまたは削除することができます。

ユーザ名とパスワードの変更

このセクションでは、ユーザ名とパスワードを手動で変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。

```
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16-SdLogonUserInfoInformation-0}]
```

```
USERNAME=<<サーバ名>%<ユーザ名>
```

```
PASSWORD=<<パスワード>
```

2. パラメータ <<サーバ名>%<ユーザ名> を、目的のユーザ名に変更します。

注: ドメインアカウントを使用している場合は、パラメータ USERNAME にドメイン名を指定します。

3. パラメータ <<パスワード> を、目的のパスワードに変更します。

データベース パラメータの変更

サイレントインストールにより作成されるデータベースのデータベース パラメータを変更するには、応答ファイルのパラメータを手動で変更します。

次の手順に従ってください:

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。 **SelectDir** ラインが表示されるのは、最初のインストール時に [参照] ボタンを選択した場合に限ります。

```
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16-SdAskDestPath-0]
szDir=<ドライブおよびフォルダ>
```

注: 記録中に [参照] を選択する場合、szDir 値を更新して DB_File_Location 値と同じにします。

```
SERVER_NAME=<DB サービス名>
DB_FILE_LOCATION=<ドライブおよびフォルダ>
ORACLE_VERSION=<10 または 11>
DB_CHARSET=<UTF8 または WE8MSWIN1252>
DB_SYNONYM=<Public または Private>
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16-SdStartCopy-0]
Result=1
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16-MessageBox-0]
Result=1
```

2. 以下のパラメータを指定します。

- <DB サービス名> フィールドにデータベース インスタンス名を指定します。
- <ドライブおよびフォルダ> フィールドにデータベース ファイルの場所を指定します。

注: SelectDir セクションおよびデータベース ファイル配置場所で、パラメータ <ドライブおよびフォルダ> を変更します。

重要: [データベース フォルダの場所] のパスには ASCII 文字のみを含めることができます。

- Oracle データベース バージョンを指定します。
- 文字セットを指定します。既定値は、UTF8 です。この値は WE8MSWIN1252 に変更できます。
- データベース シノニム タイプを指定します。デフォルト タイプは Public です。この値を Private に変更できます。

再起動オプションの変更

このセクションでは、再起動オプションを手動で変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
[6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16-SdFinishReboot-0]
Result=6
BootOption=3
2. デフォルトの **bootoption** 値は **3** です。この場合は、インストールが終了すると、自動的に強制再起動が実行されます。手動で再起動する場合は、このパラメータ値を **0** に変更します。

サイレントモードでのサーバのインストールの実行

このセクションでは、サイレントモードでサーバのインストールを実行する方法について説明します。サイレントモードはユーザ入力を必要としません。

重要: サーバインストールをサイレントモードで実行する前に、**CA Business Service Insight** をインストールするサーバで **MSTDC** サービスが開始されていることを確認してください。

- **CA Business Service Insight** をインストールするサーバ（サーバ応答ファイルを使用するサーバ）で **MSTDC** サービスが開始されていない場合：
 - インストール手順を開始する前に、サービスを手動で開始します。

サーバインストールをサイレントモードで実行するには、以下の手順に従います：

1. コマンドラインから以下のコマンドを実行します。
Cloud_Insight_Server_8.2.5.exe /s /f1"%windir%\setup.iss.
注: /f1 スイッチには、応答ファイルの場所を指定します。ログファイル（setup.log）が生成され、設定のステータスを含む設定情報が記載されます。
2. 設定が成功しなかった場合は、「ログファイルの戻り値」を参照します。テーブルに従って **Setup.iss** ファイルを修正してから、手順 1 を繰り返します。

注: 他の任意のプログラムを実行中である場合は、サーバインストールをサイレントモードで実行しないでください。

インストール後の作業

インストールの終了後、Setup.log の [ResponseResult] セクション内の ResultCode 値を検証して、サイレント設定に成功したかどうかを確認できます。InstallShield により、ResultCode キー名の後に適切な戻り値が書き込まれます。

後続のセクションでは、ログの読み取り方法と解釈方法について説明します。

ログ ファイルの設定

Setup.log ファイルは ResponseResult ファイルで構成されます。このファイルには、サイレント設定の成功または失敗を示す結果コードが含まれます。

[ResponseResult] セクション内の ResultCode キー名に整数値が割り当てられます。InstallShield のサイレント設定に成功したことを表す Setup.log ファイルの内容は以下のとおりです。

```
[ResponseResult]  
ResultCode=0
```

ログ ファイルの戻り値

InstallShield により、ResultCode キー名の後に以下のいずれかの戻り値が配置されます。

整数値	ResultCode キー名
0	成功
-1	一般的なエラー
-2	無効なモード
-3	必要なデータが Setup.iss ファイルに記載されていない
-4	メモリの空き容量が十分でない
-5	ユーザが存在しない
-6	応答ファイルに書き込めない
-7	ログ ファイルに書き込めない
-8	InstallShield サイレント応答ファイルへのパスが無効である
-9	リスト タイプ（文字列または数値）が無効である
-10	データ型が無効である
-11	設定時の不明なエラー
-12	ダイアログ ボックスが適切でない

-51	指定のフォルダを作成できない
-52	指定のファイルやフォルダにアクセスできない
-53	無効なオプションが選択されている

アプリケーション サーバ サイレント インストール(アップグレード)

サーバのサイレント インストールでは、InstallShield サイレント応答ファイル(.iss ファイル) から入力を受信されます。InstallShield サイレント インストールにより、応答ファイルから入力を読み取られ、ユーザ入力なしでインストールが実行されます。応答ファイルの形式は.ini ファイルと類似していますが、拡張子が.iss になります。

このセクションでは、アプリケーションおよび Web サーバのアップグレードのためのサーバ サイレント インストールについて説明します。

注: サイレント インストールは、通常のインストールにしか使用できません。

サーバ応答ファイルの記録

このセクションでは、サーバ応答ファイルを記録する方法について説明します。サーバ応答ファイルには、記録されたインストール中に選択された内容へのすべての応答が含まれます。サイレント インストールでは、通常のインストール処理でのダイアログ ボックスへのユーザ入力の代わりに、記録された応答を入力として使用します。

例: サーバ応答ファイルの記録

コマンド ラインから以下のコマンドを実行します。

```
Cloud_Insight_Server_8.2.5.exe /r
```

InstallShield により、設定の選択内容がすべて Setup.iss に記録され、デフォルトで Windows フォルダに配置されます。

注: (オプションの手順) 応答ファイルのデフォルトの名前および場所を使用しないようにするには、コマンド Cloud_Insight_Server_8.2.5.exe /r /f1"<location and name of answer file>.iss" を実行します。

例:

```
Cloud_Insight_Server_8.2.5.exe /r /f1"c:\%Silent%server.iss"
```

サーバ応答ファイルの例

応答ファイルの例を以下に示します。 サンプル応答ファイルが **Server/Silent** サンプル ファイル フォルダに別途用意されています。

```
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-DlgOrder]
Dlg0={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdWelcome-0
Count=6
Dlg1={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdLicense2-0
Dlg2={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-RunMigrationScriptDlg-0
Dlg3={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdLogonUserInfo-0
Dlg4={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdStartCopy-0
Dlg5={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdFinishReboot-0
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdWelcome-0]
Result=1
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdLicense2-0]
Result=1
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-RunMigrationScriptDlg-0]
RUN_MIGRATION=<0 または 1>
SERVER_NAME=<DB サービス名>
SCHEMA_USER_NAME=<DB ユーザ名>
SCHEMA_PASSWORD=<DB ユーザ パスワード>
SYS_PASSWORD=<DB SYS ユーザ パスワード>
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdLogonUserInfo-0]
USERNAME=<サーバ名>¥<ユーザ名>
PASSWORD=<パスワード>
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdStartCopy-0]
Result=1
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdFinishReboot-0]
Result=6
BootOption=3
```

マイグレーションの実行

このセクションでは、サーバ応答ファイル サイレント アップグレードでデータベースをマイグレート（更新）する方法について説明します。データベースは、現在の CA Business Service Insight バージョンと互換性を持つためにアップグレードする必要があります。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
`[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-RunMigrationScriptDlg-0]`
`RUN_MIGRATION = <0 or 1>`
2. データベースをマイグレートしないようにするには、`run_migration` パラメータの値を `0` に変更します。データベースをマイグレートするには `1` に変更します。

サーバ名の変更

このセクションでは、サーバ名を手動で変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
`SERVER_NAME=<DB サービス名>`
2. 値 `<DB サービス名>` をサーバ名に変更します。

スキーマ ユーザ名の変更

このセクションでは、スキーマ ユーザ名を手動で変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
`SCHEMA_USER_NAME=<DB ユーザ名>`
2. 値 `<DB ユーザ名>` を、目的のスキーマ ユーザ名に変更します。

スキーマ パスワードの変更

このセクションでは、スキーマ パスワードを手動で変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
`SCHEMA_PASSWORD=<DB ユーザ パスワード>`
2. 値 `<DB ユーザ パスワード>` を、目的のスキーマ パスワードに変更します。

システム パスワードの変更

このセクションでは、システム パスワードを手動で変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
`[SYS_PASSWORD=<DB SYS ユーザ パスワード>]`
2. パラメータ `<DB SYS ユーザ パスワード>` を、目的のシステム パスワードに変更します。

ユーザ名の変更

このセクションでは、ユーザ名を手動で変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
`[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdLogonUserInformation-0]
USERNAME=<サーバ名>¥<ユーザ名>`
2. パラメータ `<サーバ名>¥<ユーザ名>` を、目的のユーザ名に変更します。

パスワードの変更

このセクションでは、パスワードを手動で変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
[PASSWORD=<パスワード>]
2. パラメータ <パスワード> を、目的のパスワードに変更します。

クライアントのサイレント インストール

クライアントのサイレント インストールでは、InstallShield サイレント応答ファイル (.iss ファイル) から入力を受信し、ユーザ入力なしでインストールを実行します。応答ファイルの形式は.ini ファイルと類似していますが、拡張子が .iss になります。

クライアント応答ファイルの記録

このセクションでは、クライアント応答ファイルを記録する方法について説明します。応答ファイルには、記録されたインストール中に選択された内容へのすべての応答が含まれます。サイレント インストールでは、通常のインストール処理でのダイアログ ボックスへのユーザ入力の代わりに、記録された応答を入力として使用します。

例: クライアント応答ファイルの記録

クライアント インストール ダイアログ ボックスに対する応答を記録するために、以下のコマンドをコマンドラインから入力します。InstallShield により、設定の選択内容がすべて Setup.iss ファイルに記録され、デフォルトで Windows フォルダに配置されます。

```
CloudInsight8.2.5_Client.exe /r
```

InstallShield により、設定の選択内容がすべて Setup.iss に記録され、ファイルはデフォルトで Windows フォルダに配置されます。

注: (オプションの手順) 応答ファイルのデフォルトの名前および場所を使用しないようにするには、コマンド `CloudInsight8.2.5_Client.exe /r /f1"<location and name of answer file>.iss"` を実行します。

例 :

```
CloudInsight8.2.5_Client.exe/r /f1"c:¥Silent¥client.iss"
```

クライアント応答ファイルの例

クライアント応答ファイルの例を以下に示します。 サンプル応答ファイルが Server/Silent サンプル ファイル フォルダに別途用意されています。

```
[{8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-DlgOrder]
Dlg0={8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-SdWelcome-0
Dlg1={8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-SdLicense2-0
Dlg2={8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-SdAskDestPath-0
Dlg3={8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-SdFinish-0
Count=4
[{8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-SdWelcome-0]
Result=1
[{8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-SdLicense2-0]
Result=1
[{8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-SdAskDestPath-0]
szDir=C:\Program Files\CA\Cloud Insight\Client\
Result=1
[{8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-SdFinish-0]
Result=1
bOpt1=0
bOpt2=0
```

デスティネーションパスの変更

このセクションでは、クライアント デスティネーションパスを手動で別のパスに変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルを開き、以下のセクションに移動します。
[[{8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-SdAskDestPath-0]
szDir=C:\Program Files\CA\Cloud Insight\Client\
Result=1
2. パス「C:\Program Files\CA\Cloud Insight\Client\」を希望のパスに変更します。

サイレント モードでのクライアントのインストールの実行

このセクションでは、サイレント モードでクライアントのインストールを実行する方法について説明します。サイレント モードはユーザ入力を必要としません。

以下の手順に従います。

1. コマンドラインを開き、以下のコマンドを実行します
`Cloud_Insight_Server_8.2.5/s /f1"%windir%setup.iss command.`

注: /f1 スイッチには、応答ファイルの場所を指定します。「`setup.log`」というログ ファイルが生成され、設定に成功したかどうかなどの設定情報が記載されます。

2. 設定に成功していない場合は、もう一度コマンドを実行します。

第 8 章: Linux サーバへの CA Business Service Insight データベースのインストール

このセクションでは、Linux サーバへの CA Business Service Insight データベースのインストールについて説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[Linux インストール](#) (P. 105)

Linux インストール

このセクションでは、Linux システムに CA Business Service Insight データベースをインストールする方法について説明します。

注: Linux にデータベースをインストールする前に、O/S レベルで oracle ユーザに接続します (root ユーザから main.sh を実行しないでください)。

DB サーバへのメディアのダウンロード

次の手順に従ってください:

1. CA サポート Web サイト (support.ca.com) からメディアをダウンロードします。
2. メディアを解凍します。
3. テキスト ファイルの整合性が崩れないように、ファイルを CD に焼くか、または cd として開きます。
 - a. あるいは、ISO を Linux サーバにコピーし、`mount -o loop` コマンドを使用して整合性を確認します。または
 - b. Windows から Linux にコピーする適切な FTP または SCP ツールを使用して、`Server¥program files¥CA¥Cloud Insight¥Setup¥InstallDB` フォルダを転送します。
4. バイナリ FTP を使用して、メディアを Linux DB サーバに転送します。

注: 転送にバイナリ FTP を使用できない場合は、ファイルを UNIX 形式に変換します。

セットアップ

ファイル変換(オプション)

ファイルがバイナリバージョンで転送されなかった場合は、必要なファイルを UNIX 形式に変換します。

```
cd /u03/oblicore/CA_Oblicore_Guarantee

dos2unix Setup/InstallDB/Main.sh
dos2unix Setup/InstallDB/start_parameters.ini
dos2unix Setup/InstallDB/Build_Schema/schema_build.sh
dos2unix Setup/InstallDB/Build_DB/makedir.sh
dos2unix Setup/InstallDB/Build_DB/CreateInstance.sh
dos2unix Setup/InstallDB/Build_DB/PostCreateInstance.sh
dos2unix Setup/InstallDB/Build_TBS_Users/tbs_users_build.sh
```

ファイル権限の更新

.sh ファイルに実行権限を設定します。

```
find . -name "*.sh" | xargs -n1 chmod u+x
```

インストール サブスクリプトの修正

インストール サブスクリプトの修正

```
cd /u03/oblicore/CA_Oblicore_Guarantee/Setup/InstallDB/Build_DB
```

1. PostCreateInstance.sh ファイルを開きます。
2. PostCreateInstance.sh ファイル内のこれらの行を置き換えます。
If [\$ORACLE_VERSION = 9]
then SQL_FILE=alter_system_large_9.sql
else SQL_FILE=alter_system_large_10_11.sql

以下の行に置き換えます。

```
If [ $ORACLE_VERSION = "9" ]  
then SQL_FILE=alter_system_large.sql  
else SQL_FILE=alter_system_large.sql
```

付録 A

このセクションでは、Linux/Unix 環境における手動による修正方法について説明します。

1. `alter_system_large.sql` を開き、`sysdba` として `sqlplus` で各行を手動で実行します（このスクリプトの更新バージョンは正常に実行できます。以下のコードは回避策です）。

```
oracle@iscladoral:u03/oblicore/CAOblicoreGuarantee/Setup/InstallDB/Build_DB>
more alter_system_large.sql
connect sys/&l as sysdba
```

```
set echo on
```

```
alter system set "_adjust_literal_replacement"=true scope=spfile;
alter system set sga_target=629145600 scope=spfile;
alter system set pga_aggregate_target=209715200 scope=spfile;
```

```
shutdown immediate;
startup;
```

```
exit;
```

```
oracle@iscladoral:/u03/oblicore/CAOblicoreGuarantee/Setup/InstallDB/Build_DB>
```

```
oracle@iscladoral:u03/oradata/oblicore/oblicoredb/database/dbf> sqlplus
sys/sys@oblicore as sysdba
SQL*Plus: Release 10.2.0.4.0 - Production on Tue Mar 29 09:02:56 2011
Copyright (c) 1982, 2007, Oracle All Rights Reserved.
Connected to:
Oracle Database 10g Enterprise Edition Release 10.2.0.4.0 - 64bit Production
With the Partitioning, OLAP, Data Mining and Real Application Testing options
```

```
SQL> set echo on
```

```
SQL> alter system set "_adjust_literal_repalcement"=true scope=spfile;
```

```
System altered.
```

```
SQL> alter system set sga_target=629145600 scope=spfile;
```

```
System altered.
```

```
SQL> alter system set pga_aggregate_target=209715200 scope=spfile;
```

```
System altered.
```

```
SQL> shutdown immediate;
```

```
SQL> startup
```

```
ORACLE instance started.
```

```
Total System Global Area 629145600 bytes
Fixed Size                  2086000 bytes
Variable Size               16777510 bytes
Database Buffers            452984831 bytes
Redo Buffers                 6299648 bytes
Database mounted.
Database opened.
SQL>
```

インストール

インストール

1. ログインして **oracle** ユーザになります。

注: 具体的な手順はお使いの **Linux/Unix** のインストール仕様により異なります。

2. 以下のコマンドを入力します。

```
cd /u03/oblicore/CA_Oblicore_Guarantee/Setup/InstallDB
```

- a. **start_parameters.ini** ファイルを編集します（実際の **Client dev** については下記を参照）。

```
[DataBaseDetails]
```

```
OBLICORE_ROOT=/u03/oradata
```

```
ORACLE_HOME=/u01/app/oracle/product/11.1.0/db_1
```

```
SYS_PASS=sys
```

```
OBLICORE_USER=oblicore
```

```
OBLICORE_PASS=oblicore
```

```
DB_CHARSET=utf8
```

```
DB_SYNONYM=public
```

注: CERT ORACLE_HOME=c:\oracle\product\11.1.0\db_1

3. 以下のコマンドを実行します。

```
/u03/oblicore/CA_Oblicore_Guarantee/Setup/InstallDB/Main.sh
```

プロンプトに応答します。

Please select the character set to be used in your database:

1. UTF8 (AL21UTF8)

2. PUBLIC (WE8MSWIN1252)

For more information about selecting the character set, please see the Installation Document, Oblicore Server Installation/Installing OG 8.2.5 From Scratch/Typical Installation.

Please make your selection [1/2]

4. 1. UTF8 を選択します。

プロンプトに応答します。

Please select type of synonyms to be used in your database:

1.PUBLIC

2.PRIVATE

For more information about selecting private or public synonyms, please see the Installation Document, Installing OG 7.0 From Scratch/Typical Installation.

5. 1.PUBLIC を選択します。

以下のパラメータが表示されます。

```
CHARATER_SET
```

```
OBLICORE_ROOT
```

```
ORACLE_HOME
```

```
ORACLE_VERSION
```

```
DB_NAME
```

```
DB_SIZE
SYS_PASS
OBLICORE_USER
OBLICORE_PASS
SYNONYMS_TYPE
```

6. 選択したパラメータを確認して、正しい場合は [Y] をクリックします。
7. システムによりデータベースが作成されます。

完了時に成功メッセージが表示されます。

The installation process ended successfully

クライアントの追加インストール

1. sys として新しい DB へのログインをテストします。
2. sp ファイルを \$ORACLE_HOME/dbs ディレクトリにリンクします
3. /u03/oradata/oblicore/oblicoredb/admin/spfile/spfileoblicore.ora からリンクします
cd \$ORACLE_HOME/dbs
ln -s
/u03/oradata/oblicore/oblicoredb/admin/spfile/spfileoblicore.ora ./spfileobli
core.ora
restart database.
export ORACLE_SID=oblicore
sqlplus sys/sys as sysdba
startup

データベースの再起動

1. export ORACLE_SID=oblicore
2. sqlplus sys/sys as sysdba
3. startup

第 9 章：インストール後に必要な作業

Windows Server 2008 R2 に CA Business Service Insight 8.2.5 をインストールした後、すぐにこのセクションの手順を実行します。

これらのタスクを 1 回実行します。CA Business Service Insight をその他のサーバにインストールするときは、これらのタスクを実行しないでください。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[1 層インストール](#) (P. 111)

[多層インストール](#) (P. 112)

[3 層インストール：詳細設定](#) (P. 114)

[言語の選択](#) (P. 118)

1 層インストール

- 「インストール ガイド」の手順に従って、CA Business Service Insight 8.2.5 をインストールします。
- インストールの終盤に表示されることがある DocumentLoader エラーを無視します。
- BSI インストールの後に再起動を促すプロンプトが表示されたら、以下のよう
に Windows 32 ビット コマンド プロンプトを開きます。
 - 「[スタート] メニューの [ファイル名を指定して実行]」をクリックしま
す。
「[ファイル名を指定して実行]」ウィンドウが表示されます。
 - 「[ファイル名を指定して実行]」ウィンドウに以下のコマンドを入力しま
す： C:¥Windows¥SysWOW64¥cmd.exe
コマンド プロンプトが表示されます。
- コマンド プロンプトで、次のように入力します。

```
cd %OG_HOME%¥bin
StringsLoader.exe -a [言語文字列 xml ファイルへのパス]
(例： C:¥Inetpub¥wwwroot¥0blicore¥App_Data¥Resources)
cd %OG_HOME%¥Setup¥Migration¥
DocumentLoader.exe
```
- サーバを再起動します。

多層インストール

多層インストールの場合、以下に説明するインストール後の手順に従います。

サーバにアプリケーション コンポーネントおよび Web コンポーネントの両方が含まれる

サーバにアプリケーション コンポーネントおよび Web コンポーネントの両方が含まれる場合：

1. インストール ガイドの手順に従って CA Business Service Insight 8.2.5 をインストールし、[データベース ファイルのコピー] を選択します。
2. DocumentLoader エラーは無視します。
3. インストール後に再起動を促すプロンプトが表示されたら、以下のように Windows 32 ビット コマンド プロンプトを開きます。
 - a. [スタート] メニューの [ファイル名を指定して実行] をクリックします。
 - b. [ファイル名を指定して実行] ウィンドウに以下のコマンドを入力します。

`C:¥Windows¥SysWOW64¥cmd.exe`

コマンド プロンプトが表示されます。

4. 以下のコマンドを入力します。

```
cd %OG_HOME%¥bin
StringsLoader.exe -a [言語文字列 xml ファイルへのパス]
(例: C:¥Inetpub¥wwwroot¥Oblicore¥App_Data¥Resources)
cd %OG_HOME%¥Setup¥Migration¥
DocumentLoader.exe
```
5. サーバを再起動します。

APP コンポーネントと WEB コンポーネントを異なるサーバにインストール

Web サーバ上

1. 「インストール ガイド」の手順に従って、CA Business Service Insight 8.2.5 をインストールします。 [データベース ファイルのコピー] オプションはオンにしてください。
2. BSI インストールの後に再起動を促すプロンプトが表示されたら、以下のように Windows 32 ビット コマンドプロンプトを開きます。
 - a. [スタート] メニューの [ファイル名を指定して実行] をクリックします。
[ファイル名を指定して実行] ウィンドウが表示されます。
 - b. [ファイル名を指定して実行] ウィンドウに以下のコマンドを入力します : `C:¥Windows¥SysWOW64¥cmd.exe`
3. コマンドプロンプトで、次のように入力します。

```
cd %OG_HOME%¥bin
StringsLoader.exe -a [言語文字列 xml ファイルへのパス]
(例 : C:¥Inetpub¥wwwroot¥Oblicore¥App_Data¥Resources)
cd %OG_HOME%¥Setup¥Migration¥
DocumentLoader.exe
```
4. サーバを再起動します。

APP サーバ上

1. 「インストール ガイド」の手順に従って、CA Business Service Insight 8.2.5 をインストールします。
2. BSI インストールの後に再起動を促すプロンプトが表示されたら、以下のように Windows 32 ビット コマンドプロンプトを開きます。
 - a. [スタート] メニューの [ファイル名を指定して実行] をクリックします。
[ファイル名を指定して実行] ウィンドウが表示されます。
 - b. [ファイル名を指定して実行] ウィンドウに以下のコマンドを入力します : `C:¥Windows¥SysWOW64¥cmd.exe`
3. コマンドプロンプトで、次のように入力します。

```
cd %OG_HOME%¥bin
```
4. サーバを再起動します。

3 層インストール: 詳細設定

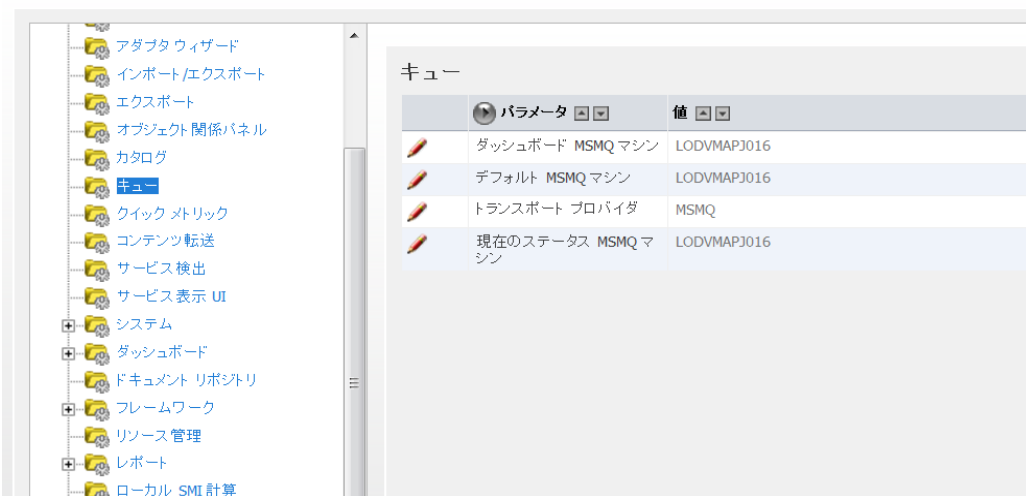
3 層環境でのインストール中、いくつかの詳細設定は自動的に更新されません。以下のアイテムを手動で更新します。

MSMQ 構成

3 層環境では、**MSMQ** 設定サーバの場所は自動的にアプリケーション サーバ名で更新されません。

1. 以下に示すように、[管理] - [詳細設定] - [キュー] でキューの設定を手動で更新します。

詳細設定



パラメータ	値
ダッシュボード MSMQ マシン	LODVMAPJ016
デフォルト MSMQ マシン	LODVMAPJ016
トランスポート プロバイダ	MSMQ
現在のステータス MSMQ マシン	LODVMAPJ016

ACE2 構成

3 層環境では、ACE2 サーバの場所は自動的にアプリケーション サーバ名で更新されません。

1. 以下に示すように、[管理] - [詳細設定] - [ACE2] で ACE2 の設定を手動で更新します。

詳細設定



ACE2	
パラメータ	値
ACE2 サーバ	LODVMAPJ016
ACE2 デフォルト エンジン	1
ACE2 ポート	5645
ACE2 有効	1
デフォルト PSL インスタンス	0
ワーカー統計履歴期間	14
定義済みブリッジの監視対象イベント	SLA_BRIDGE,MODULES_BRIDGE
定義済みブリッジの監視対象イベントを有効化	Y
最大データ イベント サイズ	100000
自己登録を使用	0
詳細登録の有効化	0

ダッシュボード: アドレス

3 層環境では、ダッシュボード: アドレスの設定は自動的に更新されません。

1. 以下に示すように、[管理] - [詳細設定] - [ダッシュボード] - [アドレス] で、ダッシュボード: アドレスの設定を手動で更新します。

詳細設定



ダッシュボード: 現在のステータス

3 層環境では、ダッシュボード: 現在のステータスの設定は自動的に更新されません。

1. 以下に示すように、[管理] - [詳細設定] - [ダッシュボード] - [現在のステータス] で、ダッシュボード: 現在のステータスの関連設定を手動で更新します。

詳細設定



レジストリ キー

3 層システムで Docx テンプレートを使用してブックレットをスケジュールすると、問題が発生します。以下に、レジストリ設定の変更によるこの問題の回避策を説明します。

CA Business Service Insight アプリケーション サーバにこの回避策を適用します。

1. 以下のレジストリ キーを追加します。
[
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\Oblicore\Install Data\
]
"WWWRootFolderLocation" = "C:\Program Files (x86)\CA\Cloud Insight"
注: タイプ = 文字列値
注: "Cloud Insight" フォルダの場所に一致する必要があります
2. アプリケーションサーバに、フォルダ「C:\Program Files (x86)\CA\Cloud Insight\App_Data\Schemas」を作成します。
3. Web サーバ上で、前の手順で作成されたフォルダに
「C:\inetpub\wwwroot\Oblicore\App_Data\Schemas\Contract」フォルダをコピーします。

言語の選択

1. CA Business Service Insight インターフェースの言語を選択するには、[ユーザー名(組織)] メニュー項目（「ログアウト」メニュー項目の左）にマウスカーソルを移動します。
[設定] メニュー項目が表示されます。
2. [設定] をクリックします。
[ユーザプリファレンス] ダイアログボックスが表示されます。
3. [優先言語] オプションからインターフェース言語を選択します。
4. [保存] をクリックします。
メッセージが表示され、CA Business Service Insight は選択されたインターフェース言語で表示されます。選択された言語は、ユーザが変更するまでデフォルトの言語になります。

付録 A: MS Word アドオンのインストール

MS Word で [CA BSI] タブの機能を使用するには、MS Word アドオンをインストールします。

注: インストール ウィザードには .NET 4 が必要です。

次の手順に従ってください:

1. CA Business Service Insight インストール フォルダの CA BSI Booklet Addon.exe をダブルクリックします。
2. 指示に従ってインストールを完了します。
3. Word を起動します。
[CA BSI] タブがリボンに表示されます。

付録 B: CA Technologies のデータベース オブジェクト用の命名規則ポリシー

CA Technologies の命名規則ポリシーに関するチェックリストを以下の表に示します。データベースの命名規則が CA Technologies のポリシーと異なる場合、別の命名規則を使用して適切な行に入力します。インストールを実行する前に、CA Support 部門にお問い合わせください

CA の命名規則	お客様の命名規則
表領域	
TBS_ACE_DATA_TAB_01	
TBS_ACE_INDEX_TAB_01	
TBS_CSL_DATA_TAB_01	
TBS_CSL_INDEX_TAB_01	
TBS_DASH_DATA_01	
TBS_DASH_INDEX_01	
TBS_LOB_DATA_01	
TBS_OBL_DATA_01	
TBS_OBL_INDEX_01	
TBS_PSL_DATA_TAB_01	
TBS_PSL_INDEX_TAB_01	
TBS_OBLIDBADMIN_01	
TBS_SLA_DATA_01	
TBS_SLA_DATA_02	
TBS_SLA_INDEX_01	
TBS_SLA_INDEX_02	
TBS_SMI_DATA_TAB_01	
TBS_SMI_INDEX_TAB_01	
TBS_SMIANA_DATA_TAB_01	
TBS_SMIANA_INDEX_TAB_01	

CA の命名規則	お客様の命名規則
表領域	
CA Technologies ユーザ	
OBLICORE	
OBLIDBADMIN	
OBLIDBADMIN PRIVILEGES	
CONNECT TO OBLIDBADMIN	
UNLIMITED TABLESPACE TO OBLIDBADMIN	
EXECUTE ON DBMS_LOCK TO OBLIDBADMIN	
SELECT ANY DICTIONARY TO OBLIDBADMIN	
CREATE PUBLIC SYNONYM TO OBLIDBADMIN	
DROP PUBLIC SYNONYM TO OBLIDBADMIN	
CREATE ANY SYNONYM TO OBLIDBADMIN	
DROP ANY SYNONYM TO OBLIDBADMIN	
CREATE TABLE TO OBLIDBADMIN	
CREATE VIEW TO OBLIDBADMIN	
CREATE SEQUENCE TO OBLIDBADMIN	
ROLE_USR_REG_PRIVS TO OBLIDBADMIN WITH ADMIN OPTION	
ALTER DATABASE TO OBLIDBADMIN	
ALTER SESSION TO OBLIDBADMIN	
EXECUTE ANY PROCEDURE TO OBLIDBADMIN	
SELECT ANY TABLE TO OBLIDBADMIN	
GRANT ANY OBJECT PRIVILEGE TO OBLIDBADMIN	
GRANT ANY PRIVILEGE TO OBLIDBADMIN	
CREATE TABLESPACE TO OBLIDBADMIN	
ALTER TABLESPACE TO OBLIDBADMIN	
DROP TABLESPACE TO OBLIDBADMIN	
CREATE USER TO OBLIDBADMIN	

CA の命名規則	お客様の命名規則
表領域	
ALTER USER TO OBLIDBADMIN	
DROP USER TO OBLIDBADMIN	
CREATE ROLE TO OBLIDBADMIN	
ALTER ANY ROLE TO OBLIDBADMIN	
DROP ANY ROLE TO OBLIDBADMIN	
CREATE ANY TABLE TO OBLIDBADMIN	
ALTER ANY TABLE TO OBLIDBADMIN	
DROP ANY TABLE TO OBLIDBADMIN	
CREATE ANY INDEX TO OBLIDBADMIN	
ALTER ANY INDEX TO OBLIDBADMIN	
DROP ANY INDEX TO OBLIDBADMIN	
CREATE ANY PROCEDURE TO OBLIDBADMIN	
ALTER ANY PROCEDURE TO OBLIDBADMIN	
DROP ANY PROCEDURE TO OBLIDBADMIN	
CREATE ANY SEQUENCE TO OBLIDBADMIN	
ALTER ANY SEQUENCE TO OBLIDBADMIN	
DROP ANY SEQUENCE TO OBLIDBADMIN	
CREATE ANY TRIGGER TO OBLIDBADMIN	
ALTER ANY TRIGGER TO OBLIDBADMIN	
DROP ANY TRIGGER TO OBLIDBADMIN	
CREATE ANY TYPE TO OBLIDBADMIN	
DROP ANY TYPE TO OBLIDBADMIN	
CREATE ANY VIEW TO OBLIDBADMIN	
DROP ANY VIEW TO OBLIDBADMIN	
USRACE	
USRCSL	
USRDASH	

CA の命名規則	お客様の命名規則
表領域	
USREDR	
USRMTN	
USRPSL	
USRRPT	
USRSLA	
OBLICORE PRIVILEGES	
CONNECT TO OBLICORE	
UNLIMITED TABLESPACE TO OBLICORE	
EXECUTE ON DBMS_LOCK TO OBLICORE	
SELECT ANY DICTIONARY TO OBLICORE	
CREATE PUBLIC SYNONYM TO OBLICORE	
DROP PUBLIC SYNONYM TO OBLICORE	
CREATE ANY SYNONYM TO OBLICORE	
DROP ANY SYNONYM TO OBLICORE	
CREATE TABLE TO OBLICORE	
CREATE VIEW TO OBLICORE	
CREATE SEQUENCE TO OBLICORE	
CREATE SESSION TO USRCSL	
ROLE_USR_REG_PRIVS TO USRCSL	
CREATE SESSION TO USRDASH	
ROLE_USR_REG_PRIVS TO USRDASH	
CREATE SESSION TO USREDR	
ROLE_USR_REG_PRIVS TO USREDR	
CREATE SESSION TO USRMTN	
ROLE_USR_REG_PRIVS TO USRMTN	
CREATE SESSION TO USRPSL	
ROLE_USR_REG_PRIVS TO USRPSL	

CA の命名規則	お客様の命名規則
表領域	
CREATE SESSION TO USRRPT	
ROLE_USR_REG_PRIVS TO USRRPT	
CREATE SESSION TO USRSLA	
ROLE_USR_REG_PRIVS TO USRSLA	
OBLICORE ROLE	
ROLE_USR_REG_PRIVS	
PART_MNG_PKG	Raw データのパーティション化を目的としています。システムがこの機能を使用しない場合、実行する必要はありません。
DB_MNG_FORECAST_PKG	予測計算。システムがこの機能を使用しない場合、実行する必要はありません。この機能は、T_PSL (現在アクティブでない) でパーティション化を利用するために開発されたものであるため、現在は使用されていません。
DB_MTN_PKG.LOG_PURGE	t_log テーブルの内容の消去に対応します。
DB_MTN_PKG.COLLECT_STATS	データベース統計収集
PRC_T_INTER_REGISTRATIONS_FLAT	イベントの再利用性を活用して、メトリック間のすべての（直接的および間接的な）関係を含むテーブルを構築します。イベントの再利用性が活用されている Raw データ レポートになります。